



武蔵野市  
中高生世代ワークショップ

# Teens ムサカツ

令和7年度  
武蔵野市 中高生世代ワークショップ  
「Teens ムサカツ」事業報告書

---

## もくじ

第1章 事業概要 .....	4
第2章 各回の記録 .....	8
第3章 提言まとめ .....	16
第4章 事業の実施結果と振り返り .....	30
第5章 人材育成 .....	36
第6章 参考資料 .....	39



## 第1章 事業概要

### 1. 事業目的

■ 中高生世代ワークショップ「Teens ムサカツ」は、将来を担う世代が市政や地域活動等に関心を持ち、市の施策に関する理解を深めたり、自分たちの世代向けの事業についての提言を行ったりできる場をつくることを目的とした事業である。令和5年4月に施行された「武蔵野市子どもの権利条例」では、子どもが「意見を表明し、参加する権利」(第3条及び第17条・第18条)が定められており、中高生世代の意見表明及び参加の権利を実質的に保障するための施策として、本事業は重要な役割を担っている。

■ 本事業は、武蔵野市が平成29年度より実施してきた(平成29年度および平成30年度は「中高生世代広場」という名称で実施)。令和5年度～7年度は、特定非営利活動法人文化学習協同ネットワーク(本部:東京都三鷹市)が本事業を受託・運営している。なお、令和5年度までは子ども家庭部子ども子育て支援課が所管であったが、令和6年度より子ども家庭部児童青少年課に移管された。

■ 令和7年度は、「『こんなまちになったらいいな』を市政に」を年間テーマに設定した。前年度と同テーマではあるが、今年度は「より実質的な提案を市政に届けること」、それによって「市政が中高生世代の提案を具体的な取り組みに落とし込みやすくする」を狙い、検討テーマを武蔵野市の各部署から募集し、参加者に投げかけた。プログラムを立案するにあたり、以下の4点を重視した。

### 1. 安心・安全な話し合いの場をつくること

ファシリテーターと参加者との信頼関係づくりや、参加者相互の応答的な関係づくりを行うために、単発ではなく、全5回の連続性を持ったプログラム内容でワークショップを構成した。参加者が継続して参加しやすい時期・日程を再検討するとともに、担当課と協議の上で月1回、5ヶ月間(8月～12月)で実施した。また、小グループの話し合いをサポートする「グループファシリテーター」として参加者にとって年齢の近い、研修を受けた大学生を配置した。

### 2. 「自分たちの声によって、状況が変わるかもしれない」という体験を通して自己効力感を高めること

「自分たちが声をあげる、動くことで、状況が変わるかもしれない」という体験は、参加者自身の自己効力感を高めること(エンパワメント)につながり、事業終了後も参加者が継続して市政等に関わっていくことを後押ししていくと考えられる。今年度のプログラムにおいては、中高生世代の声がより市政の取り組みに繋がりをやすくなることを狙い、提案に関わるテーマ設定を武蔵野市から提示してもらうこととした。もちろん最終回に設定した「市政提案会」については例年同様に提案を一方向的に市政に「伝える」だけでなく、市関係者と意見交換を行うことができる時間を十分に確保し、具体的な「応答」をもらえるような工夫を行った。

### 3. 地域資源を積極的に活用し、権利を支える大人を増やすこと

参加者がまちの現状を知るためにフィールドワークを実施した。また、その準備過程や市政提案会において、様々な立場で武蔵野市に関わる大人と本事業に参加する市内在住・在学の中高生世代が会い、意見交換を行うことによって双方の気づきと学びを深めると同時に本事業「Teens ムサカツ」を支える土壌を作ることを狙った。

### 4. 市の青少年事業等と情報交換を行い、連携の可能性を模索すること

本事業の参加と認知の裾野を広げるために、上記の地域資源の活用と同様に市内の青少年に関わる事業者との意見交換を行った。また、一日完結型ワークショップを「武蔵野市子どもの権利の日」の関連イベントとして実施した。

## 2. プログラム概要

■ 令和7年度は「『こんなまちになったらいいな』を市政に」を年間テーマとし、以下の通り全5回のプログラムを実施した。

<p><b>第1回</b></p> <p><b>日時</b> 8月25日(月) 10:30~17:00</p> <p><b>場所</b> 武蔵野商工会館(ゼロワンホール)</p> <p><b>概要</b> <b>オリエンテーション</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>年間テーマ及びプログラム概要の確認</li> <li>武蔵野市各部署からのテーマ案の投げかけと市職員との意見交換</li> <li>テーマの決定と次回フィールドワークの準備</li> </ul>	<p><b>第2回</b></p> <p><b>日時</b> 9月21日(日) 9:30~17:00</p> <p><b>場所</b> 各フィールドワーク先 及び 武蔵野商工会館(ゼロワンホール)</p> <p><b>概要</b> <b>フィールドワーク</b></p> <p>以下の2つのグループに分かれてフィールドワークに取り組んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>中高生世代の相談環境について →武蔵野市子どもの権利擁護センター、武蔵野プレイス、武蔵野市若者サポート事業「みらいる」</li> <li>テンミリオンハウスを活用した多世代交流の取り組みについて →テンミリオンハウスそ~らの家</li> </ul>
<p><b>第3回</b></p> <p><b>日時</b> 10月19日(日) 10:30~17:30</p> <p><b>場所</b> 武蔵野商工会館(ゼロワンホール)</p> <p><b>概要</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>フィールドワークを振り返り、考えたことを整理した。</li> <li>4つのグループに分かれて具体的な提案作りに着手し、「誰に」「何を」伝えるのか、ポイントを絞り提案の大枠を作成した。</li> </ul>	<p><b>第4回</b></p> <p><b>日時</b> 11月23日(日・祝)10:30~17:30</p> <p><b>場所</b> 武蔵野商工会館(ゼロワンホール)</p> <p><b>概要</b> <b>プレ提案会</b></p> <p>テーマを提示した部署の職員を迎え、プレ提案会を実施した。提示した部署に自分たちの願いやアイデアがしっかり届くように、そして最終回でより多くの方に分かり易く伝えるように、意見交換を行いながら提案の仕上げに取り組んだ。</p>
<p><b>第5回</b></p> <p><b>日時</b> 12月21日(日) 11:00~18:00 ※市政提案会は13:30~16:00で実施</p> <p><b>場所</b> 武蔵野インゴホール(レインボーサロン)</p>	<p><b>概要</b> <b>市政提案会</b></p> <p>市政提案会「『こんなまちになったらいいな』を伝えよう」を開催した。全体発表およびポスターセッションを通して、市長・教育長をはじめ市職員、地域の方と意見交換を行い、最終的なまとめを行った。全5回の振り返りおよび修了式を行った。</p>

■ 上記、本体プログラムとは別に「武蔵野市子どもの権利の日」関連プログラムとして「Youth Idea Session」を実施した。(詳細は本誌14ページを参照)

## 3. ワークショップ参加者について

■ 本事業の対象者は、「武蔵野市在住または在学の中高生世代」である。事業の広報および参加者募集は、武蔵野市が行った。

- ・周知方法:市報、市HP、市公式SNS、むさしのFM、チラシ配布など

■ 定員30名程度(申込順)のところ、最終的な参加者は24名。参加者24名の構成は以下の通りである。

- ・中学生年代:12名、高校生年代:12名、在住:18名、在学6名
- ・過去のTeensムサカツ事業参加者:8名

## 4. 運営体制について

■ 実施団体において、事業統括責任者1名および運営事務局4名の実施体制をつくり、年間プログラムを企画・運営した。ワークショップ実施にあたっては、市担当課と毎回事前に打合せを行い、ワークショップの進捗および参加者の様子を共有した上で、ワークショップ内容を協議した。

■ 各回のワークショップ全体を進行する「メインファシリテーター」は、事業統括責任者および運営事務局職員が担った。実施団体が運営するフリースクール事業等において、中高生世代と関わってきた経験が豊富な職員を配置した。また、小グループにおける話し合いを補助する「グループファシリテーター」として、実施団体が大学生等を募集し、配置した。実施団体職員よりも参加者と年齢の近い大学生が話し合いのサポート役を担うことで、参加者との関係づくりや意見を言いやすい雰囲気をつくることを期待した。なお、グループファシリテーターのファシリテーションスキル向上のため、以下の取り組みを実施した。

- ・1グループに複数のファシリテーターを配置し、相互の気づきを促すこと
- ・実施団体職員をグループファシリテーターとして配置し、必要に応じて助言等を行うこと
- ・初回から段階的に役割を広げ、徐々に大きな役割を担ってもらうこと
- ・事前および事後の振り返りを丁寧に行い、参加者との関わりを振り返る機会をもつこと
- ・「ファシリテーター研修」を2回実施し(詳細は第5章に記載)、ファシリテーションに必要な基礎的な視点および姿勢を身につけると共に、事業の狙いについて共通認識を持つこと

■ グループファシリテーターの構成は以下の通りである。

グループファシリテーターの構成	
大学生……………11名	合計 12名
実施団体職員……………1名	

※ 大学生のうち5名は、実施団体が運営するフリースクール事業や学習支援事業にボランティアとして継続的に関わっている学生である。なお、過去のTeensムサカツ参加者(現在は大学生)が2名参加した。

■ 毎回実施前に、事業責任者、運営事務局、およびグループファシリテーターで、事前ミーティングを行った。前回までの振り返り、参加者の様子を共有しながら当該回の目的やワーク内容、各グループのメンバー構成等を確認し、進行やサポート方法について協議した。また、実施後の振り返りミーティングでは、各グループでの話し合いの様子を共有するとともに、参加者一人ひとりの様子を共有し、「安心・安全な話し合いの場」をつくるために、どのようなかわりが必要か、ファシリテーターとして大事な視点を検討・共有した。

■ 参加者との連絡手段として、メールに加えてLINEオープンチャット機能を活用した。登録は任意とし、事前連絡等はメール、オープンチャットの双方を活用した。



## 第2章 各回の記録



### 第1回

## 出会う テーマの導入とグループづくり

日時 2025年8月25日(月)  
場所 武蔵野商工会館 市民会議室  
ゼロワンホール  
参加者 14人

### 実施プログラム

#### 1. 事業概要説明

Teens ムサカツの概要を武蔵野市担当課(児童青少年課)より、今年度のテーマや1年のスケジュールを事業受託団体である特定非営利活動法人文化学習協同ネットワークより説明を行った。

#### 2. アイスブレイク

例年、グループを固定した上での取り組みが主体となり、「全体での交流が少ない」という声もあったことからアイスブレイクの時間をしっかりと確保し、自己紹介やゲームなどを通じた関係構築を行った。

#### 3. テーマ提案と意見交換

今年度は中高生世代の声を「聴きたい、聴いてみたい」武蔵野市役所の各部署から候補となるテーマを提示してもらい、意見交換を行った上でテーマを選択、グルーピングを行った。

提示されたテーマは以下

- ・ 中高生世代の相談環境について(児童青少年課)
- ・ テンミリオンハウスを活用した多世代交流の取り組みについて(高齢者支援課)
- ・ 中高生世代が利用したい、使用しやすい公園について(緑のまち推進課)

※()内はテーマを提示した部署名

上記の3テーマについて、各部署の職員から具体的に意見を聴きたいポイントなどを示してもらった上で、各テーマについて職員と参加者が意見交換を行った。意見交換では、テーマに関わる市内の取り組みを詳しく説明してもらったり、日常での困りごとやテーマに関わる様々な施設の利用の仕方について共有を行った。

実施日当日の参加者が想定よりも少なかったため、「中高生世代が利用したい、使用しやすい公園について」を除く2テーマで後のワークを行うこととした。

※「中高生世代が利用したい、使用しやすい公園について」の意見交換の内容については巻末資料を参照。

### 実施目的

Teens ムサカツのテーマや概要を理解するとともに、参加メンバー同士が年間を通して集い、提案を作る仲間であるという意識を持ってもらおう  
最終的な提案作成に向けて、個々が取り組むテーマを決めたうえでグループを作る

### 所感

受付時には緊張感が高かった参加者たちだったが、例年以上にアイスブレイクの時間を作りレクリエーションを通して交流を図ることで午前中の段階で一定の関係性構築を行うことが出来た。また、初めての試みである武蔵野市からのテーマ提案と担当職員との意見交換も初回にも関わらず盛況であった。その一方で、事業参加申込者24名中10名が欠席という状況は、彼らが今後のプログラムを実施する上でのファシリテーターや参加者の関係性の構築や今後に関わる(テーマを確定する)大切な機会を逃すことになり、結果として後のプログラムにも影響を及ぼした。

第2回

知る・学ぶ  
フィールドワークと振り返り

日時 2025年9月21日(日)  
場所 武蔵野商工会館 市民会議室ゼロワンホール及び  
フィールドワーク受入施設  
参加者 17人

実施目的

テーマに関わる公共施設やサービスについて、  
実際に見学をしたり話を聞き、武蔵野市の「いま」を体感する  
活動を通して知ったこと、考えたことをもとに  
自分たちの視点でどんな提案に繋がりそうか  
グループ内でキーワードやアイデアを集積していく

所感

前回のテーマ決定をもとに実施したフィールドワークは、2つのグループともに参加者たちの刺激になっていた。普段接点の無いことに触れたことで学んだことや新鮮な疑問を頼りに手探りながらも、提案作成に向けた素地がグループとして形になり始めた。

実施プログラム

1. フィールドワーク

中高生世代の相談環境について(10名)  
武蔵野市子どもの権利擁護センター「まもルーム」→武蔵野プレイス 地下2階青少年フロアもしくは武蔵野市若者サポート事業「みらいる」相談をテーマに活動する参加者たちは、最初に武蔵野市役所内に設置された子どもの権利擁護センターを見学した。その後2チームに分かれて武蔵野プレイスと若者サポート事業「みらいる」を見学、それぞれの取り組みについてお話を伺った。

テンミリオンハウスを活用した多世代交流の取り組みについて(7名)

テンミリオンハウスそ〜らの家  
中高生世代にとって馴染みのない高齢者支援施設であるテンミリオンハウス。そもそもの成り立ちや日々の取り組み、利用者の方々の過ごし方についてお話を伺った。

2. 振り返り

中高生世代の相談環境について  
グループが分かれた先で見えたもの、聞いたことを共有し、フィールドワーク全体の感想交流を行った。特に話題に上がったのは「相談の質」について。いじめや虐待などの「解決が必要な相談」から、日々の愚痴のような「とりあえず聞いてほしい相談」まで様々な質の相談があり、それによって相談する場や相手を変えたいという話が出た。

テンミリオンハウスを活用した多世代交流の取り組みについて

参加者の中で印象に残った一つが「行けば誰かに会えると思って利用されている方が多い」ということ。日々プログラムがあり、「学校みたい」と表現する参加者もいた。多世代だけれど「対等」に出会って仲良くなれないか？など今後の提案作りに向けてそれぞれが感じたことを共有した。

第3回

つくる  
提案作成

日時 2025年10月19日(日)  
場所 武蔵野商工会館 市民会議室ゼロワンホール  
参加者 17人

実施プログラム

1. グループセッション

第2回のフィールドワークに参加できていない参加者のフォローを行うことも踏まえて、初回のテーマ選択と前回のフィールドワークにおける施設見学を経ての気づきや感想を共有し、参加メンバー視点での課題やアイデアなど出し合いながら提案作成に向けた基礎作りに取り組んだ。

2. グループワーク

フィールドワークの際に分かれた2つのグループをもとに、上記のグループセッションを通じて課題感や興味関心から4つの提案グループを作り、具体的な提案作成を行った。作成する提案を【誰に】【なぜ】伝えるのかということに参加者たちが共通認識としてもってもらうことを目的としながら議論を展開していった。

中高生世代の相談環境について

- ・相談につながるまでのプロセス
- ・中高生にとって理想の相談環境

テンミリオンハウスを活用した多世代交流の取り組みについて

- ・テンミリオンハウスを巡るスタンプラリーの実施
- ・ボランティアを通じて中高生にとってテンミリオンハウスを身近に

次回(第4回)のプレ提案会に向けて、上記の提案を運営側が予め準備したスライドテンプレートや模造紙にキャッチフレーズや具体的なアイデアなどをまとめた。



実施目的

第1〜2回までのプログラムを休んだ参加者も含めて、  
これまでのプログラム、議論内容などをおさらいし  
前提を共有した上で提案作成に向けた下地を作る  
次回実施するプレ提案会に向けて、  
伝える相手とのやり取りをイメージしながら  
基本的な提案の概要を作成する

所感

フィールドワークを経て、この回だけで提案を実質完成させるというスケジュールは、同じ時間数でも複数回ではないという点において参加者にとっては負担になったと想像できる。連続参加を前提としている以上、フォローの質をどこまで担保するべきかという課題の中で、初回もしくは前回を欠席した参加者にとってはフォローを行ったとしても他の参加者と同じ目線での議論は難しかったと振り返りかねざるを得ない。テーマが一定決まっているスタートだからこそ「状況に応じた方針の転換」が難しかったという点も踏まえると、スケジュールの組み方のみならず、行政、参加者、運営の三者にとってバランスの取れた最適解をどう据えていくことが出来るかが今後の運営における課題となる。

第4回

伝える vol.1  
プレ提案会

日時 2025年11月23日(日・祝)  
場所 武蔵野商工会館 市民会議室ゼロワンホール  
参加者 15人

実施目的

武蔵野市に提案する「素案」をもとに、グループごとに行政担当者（大人）の視点を交えながら丁寧に意見交換を行う。意見交換をもとに素案をブラッシュアップしていき、次回の市政提案会に向けて提案内容とそれに伴う資料を完成させる。

実施プログラム

1. グループワーク①

午後のプレ提案会に向けて、スライドと発表原稿を完成させ、発表時の役割分担のほか、次回の提案会においても使用される副次資料(模造紙)の作成にも取り組んだ。

2. プレ提案会・意見交換会

第1回のテーマ提示を行った武蔵野市職員に向けて、プレ提案を実施した。スライドによる発表を行った後に、各提案グループを担当課職員(一部運営法人職員)が周り、詳細な意見交換を行った。

3. グループワーク②

①発表用PPT ②ポスターセッション用模造紙(詳細版・各グループごと)  
以上2点の制作をワークに組み込んだ。PPTについては基本的なひな型を予め準備しイメージをやすくする一方で、模造紙については各グループのグループファシリテーターと参加者が目指す提案に応じた作成とした。



所感

プレ提案を実施した意図は、「テーマを提案した担当課(職員)が事前に提案の全貌を把握し本提案の完成度を高めるサポートをすること」「参加回数や年齢などの要因で提案作成への関わりに濃淡がある各参加者が提案の理解と言語化を深めること」だった。提案会に向けた練習という意味でも、双方ともに良い結果に繋がったと思われる。

第5回

伝える vol.2  
市政提案会「こんな‘まち’になったらいいな」を伝えよう

日時 2025年12月21日(日)  
場所 武蔵野スイングホール レインボーサロン  
参加者 参加メンバー 22人 来場者 15人

実施プログラム

1 事前準備

午後の提案会に向けて、発表原稿作成やリハーサルなど各グループで最後の詰め作業に取り組んだ。

2 市政提案会「こんな‘まち’になったらいいな」を伝えよう

提案会来場者  
小美濃市長、吉原教育長、武蔵野市役所関係各課(高齢者支援課、児童青少年課、子ども子育て支援課、生涯学習スポーツ課)、Teens ムサカツでお世話になった地域の方々

タイムテーブル

- ・ 全体発表: 全3グループ各5分程度のスライドによる全体発表
- ・ ポスターセッション: 全4グループが作成した模造紙を展示したブースを設置し、来場者は自由に各ブースを回りながらムサカツ参加者と15分/グループを目安に意見交換を行った。
- ・ 市長、教育長による講評: 各グループの提案に対するフィードバック、意見交換での感想など

3 ふりかえり、まとめ

提案会来場者が退場の後、グループごとに来場者から寄せられた感想や意見に目を通しながら感想交流を行い、個々の振り返りレポートを記入して全5回のまとめとした。

4 修了式

グループファシリテーターより1名ずつ修了証を手渡し、一言ずつ感想をまわす形で修了式を行った。

実施目的

グループごとに作成した提案を武蔵野市に関わる大人(市長、教育長、行政職員、地域の方々)に直接伝える。「提言」に対する意見交換を行い、感想や質疑など様々な形でフィードバックをもらおう。一定の達成感とメンバーシップを醸成し、次年度以降の取り組みに繋げていく。

所感

提案会は「ムサカツ参加者のもの」というコンセプトで、最低限の運営(司会、開会挨拶)を参加者自身で行ってもらう形とした。前年度に引き続き「意見交換の時間が足りなかった」という感想が多く寄せられ、今後最終回をいかに締めくくっていくかは引き続き課題となる。また、中高生世代の相談環境について提案を作成した2つのグループは提案の構成上、全体発表を2つにまとめざるをえなかった。それが要因となり、中高生世代1人1人が来場者と言葉を交わす機会よりも、提案自体の説明のボリュームが増えてしまったことはプログラム設計を考える上での今後の課題となった。

## Teens ムサカツ関連企画 Youth Idea Session

日時 2025年11月29日(土)

場所 武蔵野市役所 802会議室

時間 14:00~17:30

参加者 15名(中学生12名、高校生3名 / 市内在住13名、市内在学2名)



### 実施目的

武蔵野市子どもの権利条例(権利の日)について知る

R8~9年に実施予定の Youth Festa(仮)に向けて、中高生世代が関心のあること、楽しいと思えるアイデアを出し合う

中高生世代の主体的な事業運営を見据えて、コミュニティ作りを目指す

### 実施プログラム

#### アイスブレイク

パスデーラインや4マス自己紹介で全体、テーブルごとの交流を図りながら緊張をほぐしていった。

#### ワーク①

自分の興味や関心を書き出す個人ワークを経て、グループ間で共有をし合った。

#### 事例紹介

同世代がイベントを企画・実施した事例を運営側から2例、武蔵野市の担当課職員が2例、計4例を紹介しイメージ作りを行った。

#### ワーク②

前段の興味・関心のリストアップをもとに、より具体的な企画として考えてみる。企画アイデアが出揃った段階で全体での共有を行った。

### 参加者の振り返りアンケートより

- ・ 終了後に「振り返りアンケート」を実施した(回答数n=14)。
- ・ 「全体的な満足度」は、「満足」が8名、「やや満足」が5名、「まあまあ」が1名だった(「やや不満」「不満」は0名)。
- ・ 以下、「参加してみたの気づき」(自由記述)のコメントを抜粋する。
  - 色々な人がいて面白かった。みんなが考えたことがない、やったことがない行事を考えたい。
  - 他の人と集まって考えることで自分にはない斬新なアイデアを知ることができた。
  - 実行するためのシュミレーションやプレゼンまで出来たらいいと思った。
  - 自分では思いつかないアイデアがたくさんでとってもやりがいがあったと思った。
  - 学校でもアンケートをしてみたい。
  - 地域のイベントをもっと豊かにしていきたいと思った。

### 所感

武蔵野市子どもの権利の日イベント検討に向け、単発のワークショップを実施した。令和9年に実施予定のイベント内容についてのアイデアを集めるプログラムであり、具体的なアイデアとは距離があるものの自由な発想で様々なアイデアを引き出すことができた。実際のイベント実施を見据え、私たち大人がどこまで手を貸し、枠組みを整え、中高生世代の手に委ねていくのか。また、今回の参加者以外のより多くの声を聴き取り、アイデアの具体化に向けた仕組みづくりを行っていくのが今後の課題となるだろう。





## 第3章 提言まとめ

提案内容は参加者の声を大切にしながら、運営側で整理をしています。  
参加者が作成した提案会当日のスライドや原稿は巻末資料をご覧ください。

Aチーム

キャッチフレーズ

テンミリー  
～スタンプを添えて～

提案内容

市内のテンミリオンハウスをまわるスタンプラリーを行う

提案の背景

この提案をする理由は二つある。一つ目は、「多世代との交流をもっと深めたい」ということ。二つ目は、「テンミリオンハウスの存在を知ってもらおう」ということ。

多世代交流のテーマについて話す中で、「テンミリオンハウスを身近な存在に」「若者世代に興味関心をもってもらいたい」という市のニーズと、「楽しそう”や”ワクワク”がほしい」という中高生のニーズの両方にこたえる提案をつくろうとした。そもそも中高生世代がテンミリオンハウスについて知らないことから、スタンプラリーのようなイベントにしたらおもしろそうということでこの提案になった。

提案のポイント

1.「ミッション」の設定

ただスタンプを押すだけでは「多世代交流」につながらないので、各テンミリオンハウスで「ミッション」を設定する。「ミッション」の例は、テンミリオンハウスで日常的に開催されているプログラムに参加するなどである。

2.利用者に関係性を築く⇔それぞれの特色を知る

スタンプラリーの方法は二つ考えた。一つ目のやり方は、一か所のテンミリオンハウスに何回か行ってもらうイベントに参加してもらう形。同じ人たちと何回も交流することができ、テンミリオンハウスに来られる方たちは皆さん地域の方たちなので、利用者の方と関係性を築くことができる。

二つ目のやり方は、武蔵野市内にあるテンミリオンハウス7か所をそれぞれ行ってもらうイベントに参加してもらう形。武蔵野市内のそれぞれのテンミリオンハウスの特色などについて「まず知ってもらう」ということが可能となる。

3.長期休み期間の実施と「報酬」

開催時期は、長期休み(夏・冬)の2日間という形を考えた。移動は、徒歩だけでなくバスや電車の利用も可にする(バスはムーバスの利用を推奨)。また、スタンプラリーをするときに、参加した回数や場所の数に応じて、QUOカードなどの「報酬」があると中高生の参加を促すことができる。

Bチーム

キャッチフレーズ

テンミリオンハウスをボランティア  
アで身近な場所に

提案内容

テンミリオンハウスでの「ボランティア」を中高生にとってもっと参加しやすくする

提案の背景

テンミリオンハウスでの多世代交流について、「興味があるけど勇気が出なくてボランティアなどに来れない人がある」という課題があると考えた。参加しづらい理由としては、テンミリオンハウスがどんな雰囲気か活動しているのかが分からないこと、どんな人と関わるかイメージがつかないこと、中身が配膳など一方的なものだと関わりづらいなどがある。

もう一つのグループに、ボランティアに興味を持つきっかけを持ってもらうための発表(スタンプラリーの提案)をしてもらったので、ある程度興味を持った人達を対象にすることにした。

提案のポイント

1.きっかけづくり

ボランティアの情報をそもそも知らないことが多いため、きっかけ作りが必要だ。

一つ目は、学校で配るという方法。学校でチラシを配れば、それを見せて友達を誘いやすい上、親にも「これに行ってくるね」と気軽に言いやすい。さらに、市報などを見ない人にも情報が届きやすい。二つ目に、チラシに過去のボランティア等の参加者の感想を載せることで、テンミリオンハウスの雰囲気を知ることができる。三つ目に、SNSだと市のアカウントなどをフォローしている人しか情報が届かないため、スーパー、掲示板、駅などのたくさんの人が目につく場所にポスターを貼ること。

2.利用者さんとかかわる「実感」を得る

活動内容は、利用者さんと一緒にする、利用者さんに教えてもらう、私たちが教える、の三つがある。

例えば、編み物や書道など日常的に行っている企画と一緒にやると、利用者さんとの距離が近くなって話しやすくなる。また、昔遊びや体験した歴史などを教えてもらうと、普段の生活では考えないことを考える機会にもなる。さらに、私たちがChatGPTや、LINEなどの使い方を教えることもできるかもしれない。

利用者さんになにかを「してあげなきゃ」というよりも「対等に」かわりたいたいという願いもあり、このような活動を通して、利用者さんとかかわる「実感」が得られるといい。

3.長期休みに・友だちと

活動に一人で参加するのはハードルなため、友達と一緒に、夏休み期間などに参加できる形だとよい。また、何をしたら利用する方々が喜んでくれるのかまだイメージしづらいため、やることは前もって決めてあった方が参加しやすい。

提案づくりのプロセス①  
「フィールドワークの振り返り」

多世代グループの提案づくりは、テンミリオンハウス「そ～らの家」にフィールドワークに行った感想や自分たちが感じた「テンミリオンハウスが大事にしていること」を出しあうところから始めました。その上で、そもそも中高生世代にとっては「多世代交流」するにあたって、参加のハードルや交流のしづらさがあること、そのために参加のきっかけが必要なことも話題になりました。



テンミリが大事にしていること

(フィールドワークの感想より)

- 世代差があまりない(高齢者どうし)の話しやすい、話が合う
- さまざまなプログラムがある。高齢者の学校のような感じだった。
- 「行けば誰かに会える」というのを楽しみにしている
- 毎回のお昼ご飯の献立やイベントが楽しみ!
- 高齢者本人の意見を尊重すること
- 利用者さんがまた来たいなっておもえるように
- イベントでは地域とのつながりを大切にしている

交流しづらい理由

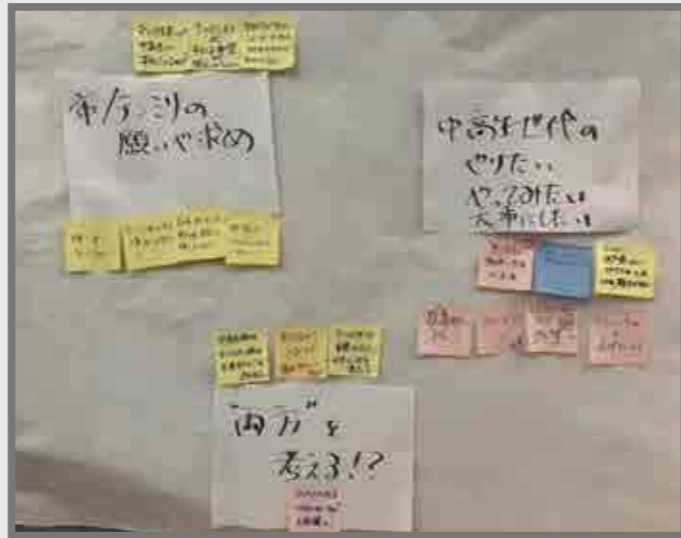
- そもそも自分の祖父母と会わない
- 日常的に高齢者と関わりがない
- 同じ話題でしゃべることが難しい
- 同世代がいなくて一人で行きづらい
- どういう雰囲気かわからない
- 「忙しい」が先にきてしまう
- (学校でやるとなれば行くけど)
- 「ボランティア」だと一方的すぎる
- 「事前予約」がハードル
- 中高生の行ける時間に開いていない(遅くまでやっている日があれば…夜の部?朝食目的で早くからやる?)

参加のきっかけ

- 友だちから誘われれば
- 親が地域活動に関わっていて誘われた
- お祭などからは参加しやすい
- マンガがあったり勉強ができたり気軽に行けるといい
- 「授業」なら行く…?武蔵野市民科の授業で関わる機会がほしい

### 提案づくりのプロセス② 「市のニーズと中高生世代が 大事にしたいこと」

その後、「自分たちがやりたいと思っ  
ても必ずしも市に受け入れてもらえる  
か分からない」「そもそも市は自分たち  
になぜこのテーマを出しているんだっ  
け?」という声をきっかけに、「市/テン  
ミリアンハウスの願いや求め」と「自分  
たち中高生世代が大事にしたいこと」を  
一度整理することになりました。その上  
で、2つの要素をふまえてどんな提案を  
つくっていくか、アイデアを出しあいま  
した。多くの中高生世代はそもそもテン  
ミリアンハウスの存在を知らないことや、  
活動はしてみたい人もいるけれどつな  
がっていない現状があることが課題とし  
てあがり、最終的には「スタンプラリー」  
と「職場体験(その後「ボランティア」に)」  
の2つのアイデアを軸に提案づくりを行  
うことになりました。



#### 市・テンミリの願いや求め

- ・ 担い手になってほしい
- ・ テンミリアンハウスを身近な存在に
- ・ 若者世代にも興味・関心をもってほしい
- ・ 地域とつながってほしい

#### 中高生世代が大事にしたいこと

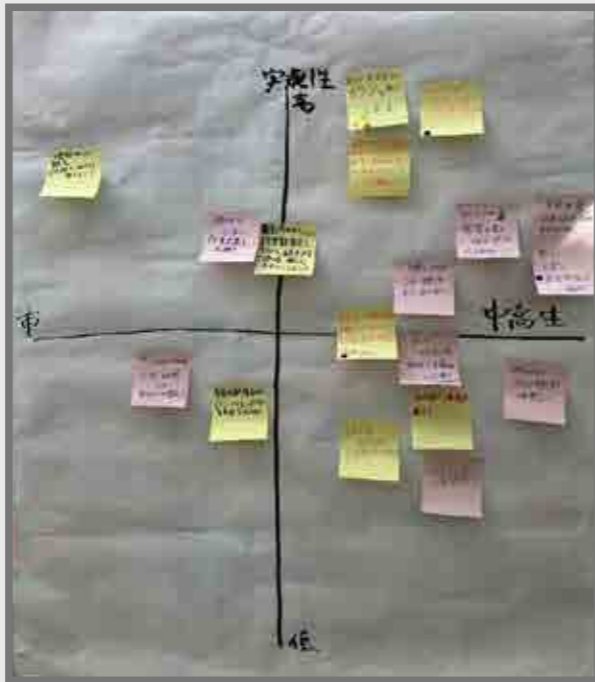
- ・ たのしい、ワクワクのなにか、魅力がほしい
- ・ 楽しく過ごすこと
- ・ 「楽しそう」には趣味の共有が必要
- ・ 「してあげなきゃ」より「対等」…!
- ・ 友だちみたいにかかわりたい
- ・ コミュニティを広げたい!

#### 「担い手が足りない」なら…

- ・ 就業体験
- ・ 助けがほしいな~(人手不足)を補う
- ・ 料理教室をしながら、ごはんをつくる(担い手・楽しむモチベーション)
- ・ 自分からはハードル高めだからボランティアの募集みたいにしてほしい
- ・ イベントの開催があるのならボランティア的に手伝う
- ・ アルバイトのような形で募集する

#### 「そもそもテンミリを知らない」ので…

- ・ スタンプラリー
- ・ 小中学生がチラシをつくって配る
- ・ 小中の公立校では総合的な学習で!(市へのお願いのな)



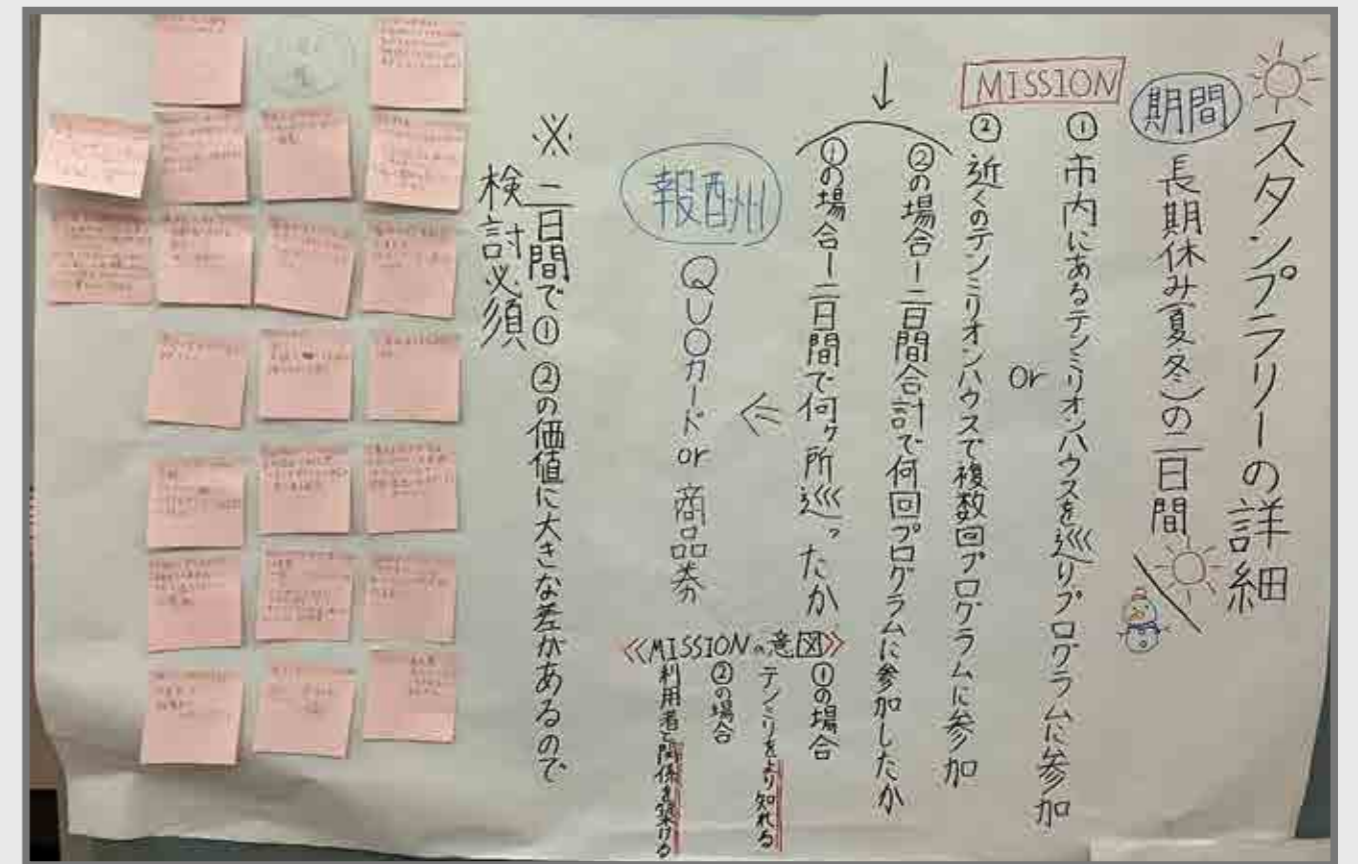
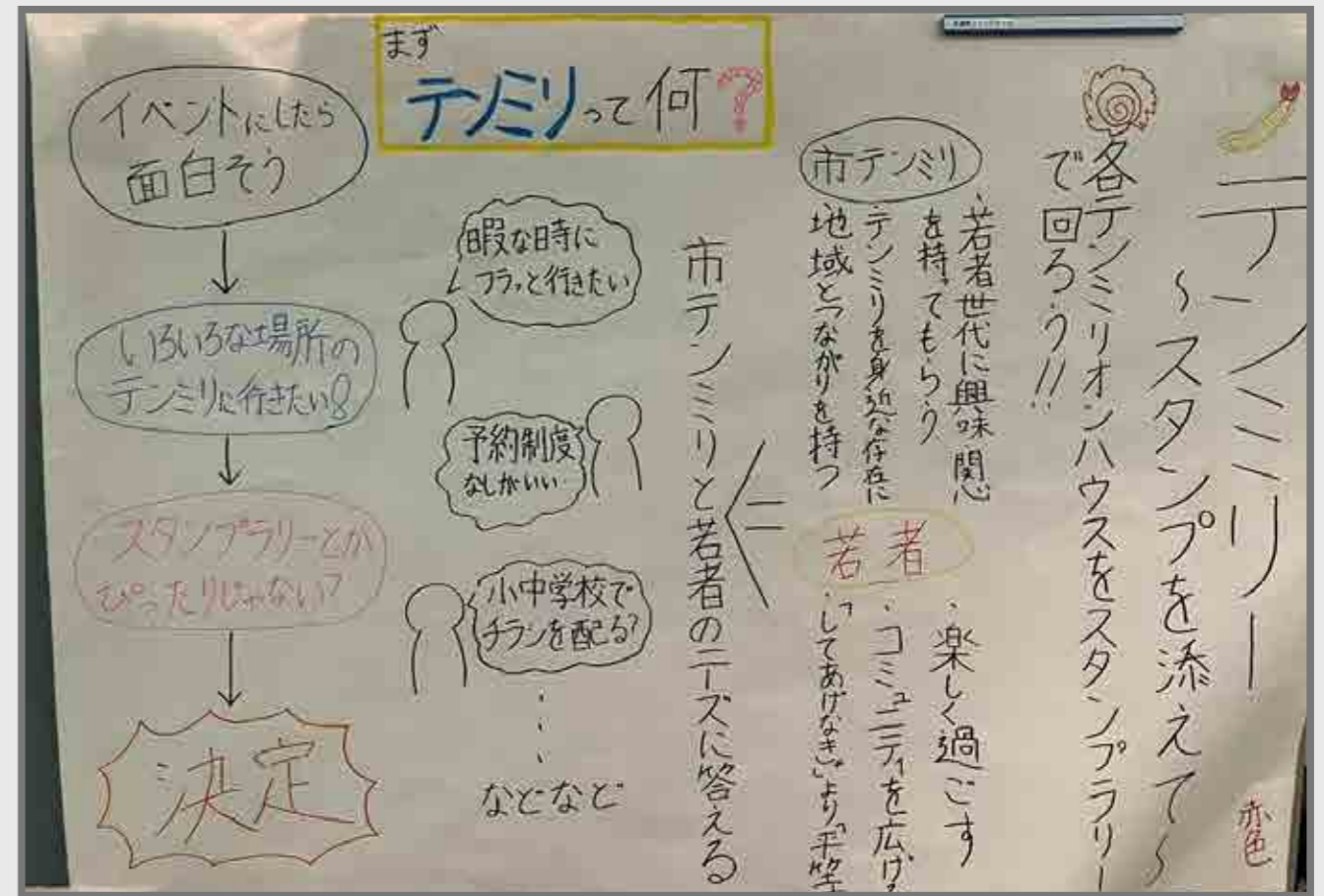
#### 「もっと気軽にに行きたい」から…

- ・ 暇なときにフラッと行けるような感じへ
- ・ 自習ふれあいスペース的なものがほしい(例:マンガ、ボードゲーム)
- ・ 多数で(友だちなどと一緒に)行けるようなスペースがほしい
- ・ 予約制度なしに(中高生がお手伝いに行くのは事前連絡なので)
- ・ レストラン(のような場所)に近づける

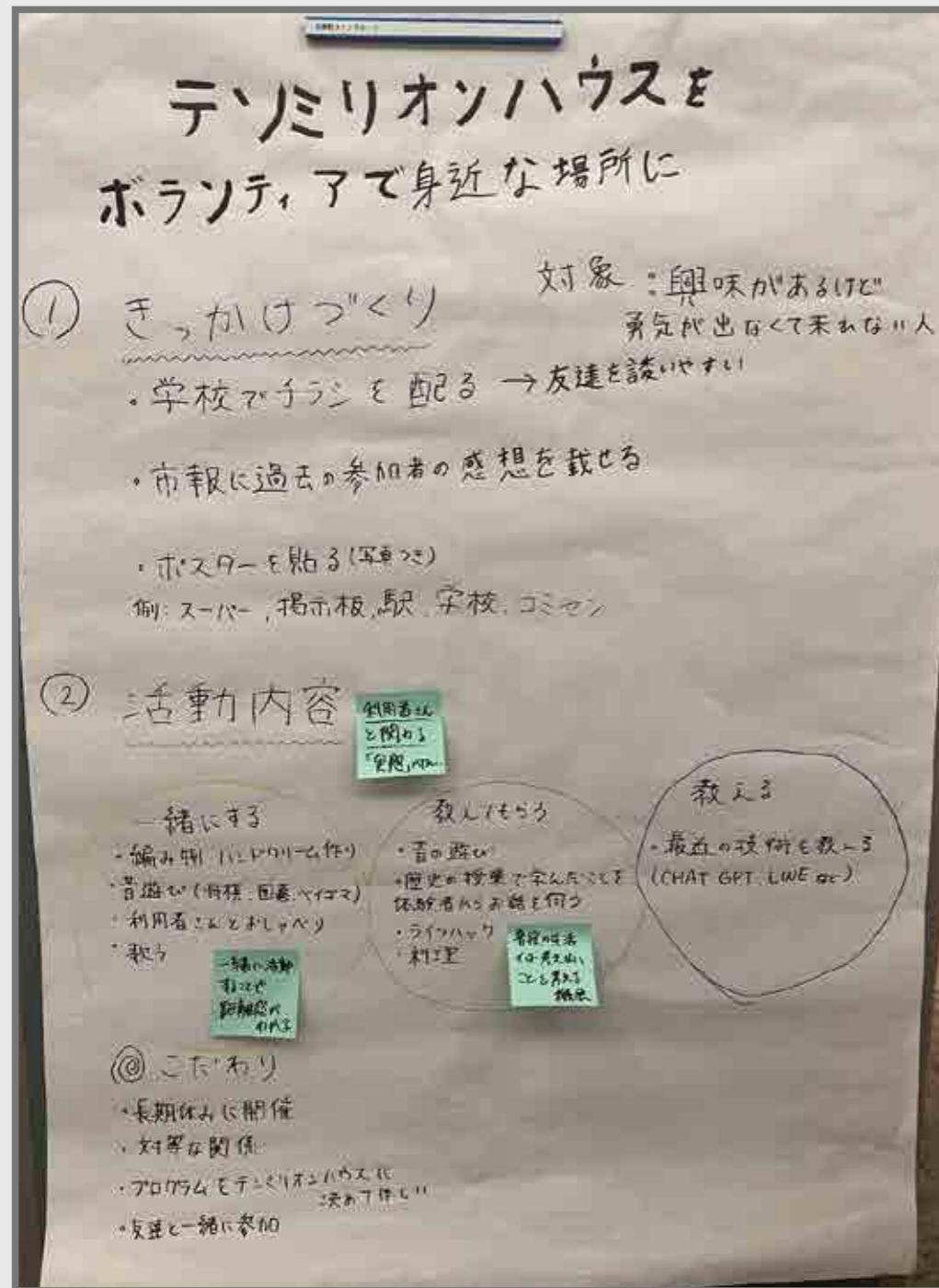
#### 「自分たちでつくる」なら…

- ・ イベントとは言っても自分たち主催とかだったら楽しいんじゃない?
- ・ 自分たちでテンミリアンハウスの人たちも楽しめるようなゲームを考えて提案する
- ・ 中高生が関われる新しいアクティビティをつくる(長期休み)
- ・ 自分たちで講座をする

### ポスターセッションで 使用した提案模造紙



ポスターセッションで  
使用した提案模造紙



来場者との意見交換より  
**Q.「多世代交流」の中高生側のメリットは？そもそも「交流」したい？**  
 ・単純におしゃべりだけでもたのしい  
 ・笑顔になってもらうのはうれしい  
 ・人生経験が豊かな人たちだから新しいことを知れるかもしれない  
 ・たとえば麻雀の対戦ができれば、ふだん接点がない人とできるのはおもしろい  
 ・年齢が違うことによる楽しさがあるかも  
 ・関わった経験があまりないのでイメージがつかないのはある

市長・教育長の講評

まず若者と高齢者が一緒に何かする。今のテンミリオンハウスに通っていらっしゃる方、高齢者って、実はすごくアクティブです。例えばバブルの時に経験した楽しいことや苦労したことを聞いてみたら面白いかもしれません。また、そういう人たちと一緒にイベントを作ったりすると、ものすごいアイデアをたくさん持っているの、皆さんが気づかなかつたり、学校でも使えるような楽しいアイデアも知ることもできると思います。

次に、若者が教えるということ。アクティブな高齢者の皆さんは生成AIやSNSを使ってみたくて思っている方もいらっしゃると思います。武蔵野市では、自分だけが学ぶのではなく、学んだことを他の人に教えることによって、またフィードバックをもらう、「学び送り」を推奨しています。この学び送りにも繋がっていくので、今の時代の「流行り」を高齢者の方に教えるというのはとてもいいことだと思います。

今回皆さんが考えてくれたイベントをするにしても、高齢者と中高生の接点を作るにしても、お互いWin-Winじゃなければ絶対上手くいかないと思うので、何かそういったことをテーマにおいてやっていくと実現できるかなと思いました。

—— 小美濃市長

テンミリオンハウスの提案について私が感じたのは「継続性」です。みなさんにテンミリオンハウスのことを知ってもらって、そこから先、中高生にとってテンミリオンハウスで交流することが、どんな意味を持つのか。Win-Winの関係性と言うのでしょうか、学ぶ・教わるという関係がテンミリオンハウスの中で、これからどう繋がっていくかというのは、すごく大事ななと思っています。例えば、私がいいなと思ったのは、中高生の強みであるスマートフォンの利用の仕方やChatGPTなどを教えてあげること。その辺りはやはり高齢者の方に苦手な方が多いので、そういった中高生の強みを活かした形の交流であれば、お互いにメリットがあって学ぶところが大きいかなと思います。まずはテンミリオンハウスのことを知ってもらったその先、継続的にどうやって中高生世代と利用者の方の交流を持続するのかというあたりがすごく難しいですが、そこにしっかり視点を当ててまとめられていたので、すごく良かったと思います。

—— 吉原教育長

来場者の付箋やアンケートより

- ・スタンプラリーの「ミッション」後にアンケートや感想をもらうと、利用者じゃない人目線で感じることをテンミリ側がキャッチできる
- ・スタンプラリーなどは入口であるので、継続性を考えたときにテンミリの食事券を複数枚発行して友だちと一緒に来られるようにして継続性を持たせるようにしたい。
- ・学校のプログラムにくみこめるといいかも。
- ・「担い手」ってだけでは若者に申し訳ないと思っている。
- ・市内に七カ所あるので、スタンプラリーは七か所ごとに個性あるもので魅力をつくるのもあり
- ・ミッションはテンミリの利用者と一緒に考えてもいい。「張り合い」が生まれる。
- ・利用者である高齢の方のお話が直接聞けていないので、その解像度が低く感じた。
- ・今はチラシを市立校ではデータ配信に変わってしまったが、やはり紙で配られた方が友だちとそれを見ながら話せて良いという意見が参考になった。

A チーム

キャッチフレーズ

「信頼・安心」から始まる相談を

提案内容

「悩みを話す(=相談)」ことを目的として行くのではなく、「会話・雑談」を目的として居場所へ行き、その先で悩みを相談につなげる!

提案の背景

「相談」は中高生にとって身近なテーマであったが、「相談」に対するイメージは微妙にズレていた。中高生は、日々の生活で抱えた不満や愚痴を発散する場を求めており、それを「相談」と捉えているメンバーもいた。しかし、一方でいじめや虐待といった深刻な悩みを相談したいと思っているメンバーもいた。また、中高生は相談していることを周囲に知られることに強い抵抗感があり、「〇〇相談室」といった相談していることがバレてしまう場所には行きづらさがある。そのため、まず「相談すること」ではなく、「居場所につながることを」最初のきっかけとすることを提案した。

提案のポイント

1. 居場所を知る

まずは、居場所を知ってもらわなければ始まらない。より多くの中高生の目に届くように、LINEやInstagramといったSNSを活用して情報を発信する。また、スマホを持っていない人がいることも考慮して学校で紙のチラシを配布していく。

2. 中高生に伝える情報とは

「相談すること」がメインの目的ではなく、雑談や勉強もできる多目的な居場所であることを伝えていく。また、初めて行く人にもわかりやすくするために利用時間や相談相手の情報、これまでに寄せられた相談内容(※)など伝える。(※4コマ漫画のような形で見せられると、中高生もイメージが膨らませやすいのではないか)

3. 相談につながる仕組みづくり

最初の入り口が居場所であっても、悩みや葛藤を抱えている中高生はたくさんいるため、居場所の中での会話や雑談を通して必要な場合には相談につなげていくことが必要。相談につながるかどうかは大人が判断するのではなく、中高生自身が自分の意思でつながることが理想的。必要に応じて聞きにくいことはアンケートの実施も検討する。

B チーム

キャッチフレーズ

おいでよ!悩める中高生の森  
~行きやすい相談場所とは~

提案内容

多様な悩みを抱える中高生たちが、軽いか重い(相談の質)に関係なく、自分たちの想いを伝えることができる居場所づくりを提案する!

提案の背景

中高生にとって「相談」とは幅広い意味を持つが、「相談する場」を求める中高生の声は思っていた以上に多かった。しかし、フィールドワークでいくつかの施設を見学したところ、既存の施設は利用できる時間が短く、中高生が放課後に利用することが難しい状況にあった。そのため、このグループでは中高生の目線で今よりも「相談」が利用しやすくなるための方策を考えた。理想を追求したことで実現に向けたハードルは高くなってしまったかもしれないが、中高生の悩みや困り感から拾い上げた要素(相談場所や相談相手など)も盛り込んだ提案となっている。

提案のポイント

1. 対象を広げるための時間の延長

中高生の多くは学校に通っており、放課後に居場所や相談を利用したいと思っているため、それが可能となるような時間設定をして欲しい。また、土曜日や日曜日にも利用できるとより利用する中高生は増えていくと思われる。

2. 目的に応じた相談場所(スペース)の活用

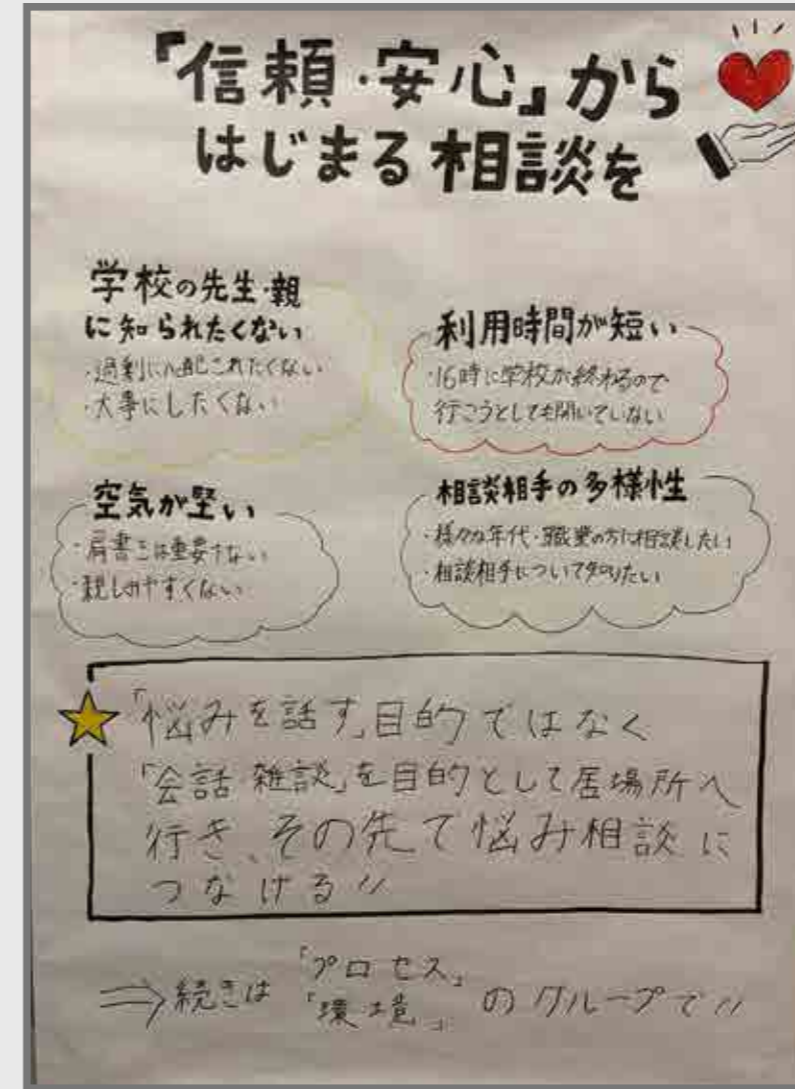
中高生は相談していることを周りに知られることへの抵抗感が強い。そのため、相談していることを悟られない工夫が必要となる。GPSで親に居場所を知られてしまうリスクがあるため、武蔵野プレイスのような既存の施設を活用して欲しい。また、施設の中も相談するフロアと、雑談・学習等をするフロアを分けるなど相談していることがバレないようにして欲しい。

3. 相談相手についても多様性を

中高生の相談内容は多岐に渡ります。大人からすれば「それって相談する必要ある?」と疑問に思うような内容もあるかもしれませんが、些細なことが課題解決につながるかもしれません。年齢の近い大学生から資格を持った弁護士まで幅広い年齢層で、様々な職種の人がいると相談しやすさは格段に上がる。

中高生の「相談」に対するニーズ

中高生たちが「相談」というテーマに対して最初にどんな想いを抱いたのか。第1回~2回の話し合いの中で聞かれていた中高生たちの声をまとめた。現状に対する不満や要望だけでなく、大人とは少し違った中高生ならではのリアルな想いがたくさん出てきた。



Q.親(保護者)ってどんな存在?

- ・(相談していることを)知られたくない!
- ・電話での相談だと親に聞かれる。
- ・学校のPCで相談したい。親にバレるから。
- ・親に相談すると重く受け取られてしまう。
- ・既存の施設は入りやすい(親に説明しやすい)

Q.スクールカウンセラーはどんな存在?

- ・スクールカウンセラーは学校の息がかかっていそう。逆に相談しづらい。
- ・スクールカウンセラーに心を開くのは難しい。
- ・スクールカウンセラーは身近じゃない。遠い存在。
- ・カウンセラーに相談しても担任に情報がいつてしまうのが嫌。
- ・週何日かしかいない。予約も埋まっている。
- ・毎日いて欲しい。
- ・保健室じゃなくてもどの場所でも相談できるのが理想。
- ・話しかけやすくするためにはどうしたらいいんだろう?

Q.相談って行きづらい?

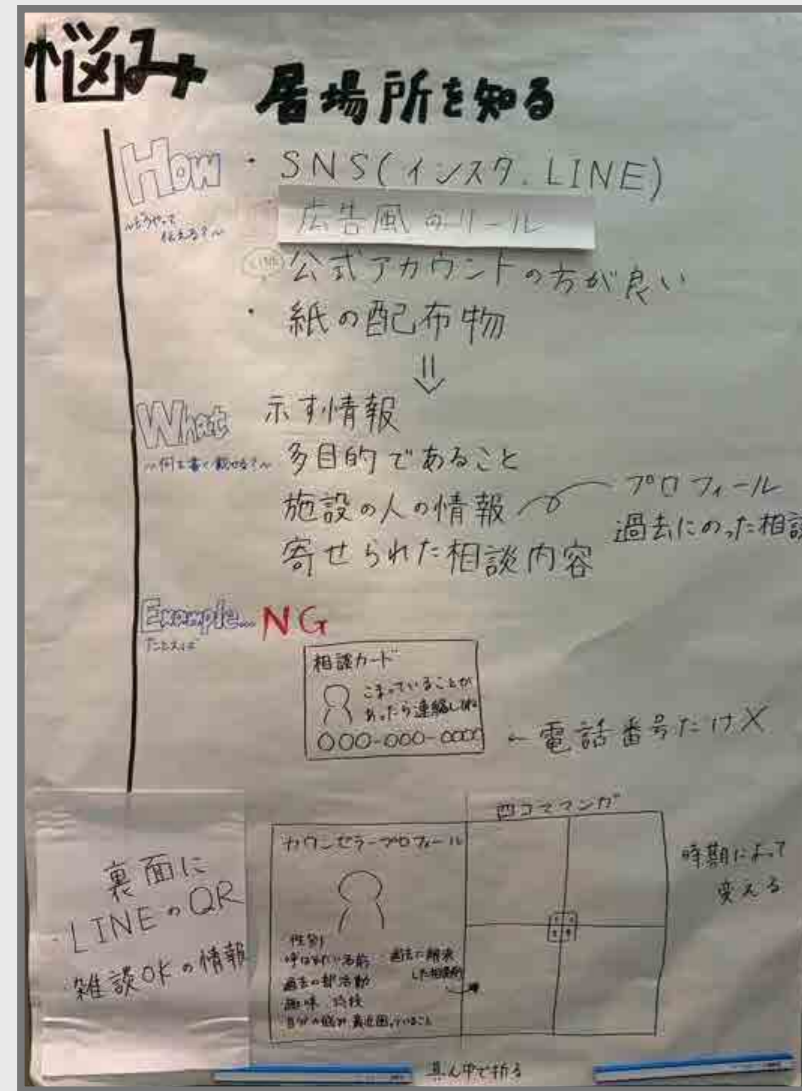
- ・友達紹介だと行きやすい。
- ・相談するだけの「窓口」には行きづらい。
- ・LINE、DM(ダイレクトメッセージ)みたいな気軽さが欲しい。
- ・深刻な話ばかりでなく、明るい話もして欲しい。
- ・悩みが重くないと行っちゃいけないのか?
- ・急に「悩みある?」はちょっと嫌。出せと言われて出るものではない。
- ・(どんな場所か)口コミ欲しいかも。
- ・身近な人にはバレたくないから近くはちょっと行きづらい。
- ・自然と大人と交流できる場所だと話しやすい。
- ・相談じゃなくて不満を話したい。
- ・悩みの痕跡は残したくない。
- ・そもそも相談ってなんだろう...?
- ・学校でやっている「いじめアンケート」って意味があるんだろうか?先生からの圧があって書きづらかった。
- ・ご飯を食べたり、何かをしながらだと相談しやすい。

Q.どんな人になら相談しやすい?

- ・相談内容(悩み)によって相手を選びたい。
- ・共通点のある人と話したい。
- ・相談は年の近い大人と話したい。
- ・高圧的ではない人がいい。
- ・ただ話を聞いて欲しい。アドバイスはいらさないかも!
- ・相談に行ったら、向こうから話しかけて欲しい。
- ・固定の人(毎回決まった人)がいたら相談しやすい。
- ・(相談する人と)日常的に関わりが欲しい。
- ・話したい相手を選びたい(マッチングアプリのような)
- ・学校には言わないで欲しい。
- ・「わかった!わかった!」だけでなく、否定すべきところはちゃんと否定して欲しい。
- ・自分のことをある程度知ってくれている大人。
- ・一対一ではなく、相談する際に味方が欲しい。

### 提案内容補足①

26~28 ページでは市政提案会でも使用した模造紙を使って中高生が伝えたかった内容を補足説明している。最初のグループは相談しやすくするためには、まず居場所につながる事が大切とした上で、居場所につながるまでのプロセスを提案している。



**居場所を知ってもらうために**

- やはり中高生の目に届くようにするためには SNS (Instagram や LINE など) が一番効果的なので、SNS を使って居場所の存在を周知していく。
- 公式アカウントの方が信頼してもらえるかもしれない。
- SNS を含めたインターネットの情報は、自分で調べた情報に偏って入ってくるため、必要な人に情報が届かない可能性がある。そのため、学校の配布物等の紙媒体も活用していく。

**中高生が知りたい情報って**

- 最初のきっかけは相談ではなく居場所。自由に過ごすことができるスペースがあることや、学習スペースがあることなど、様々な目的で利用できる場所であることを伝える。
- 「相談」を利用したいと思っている人に向けて、相談相手の情報(年齢、性別、職種、資格の有無など)を事前に伝える。そうすることで、最初の緊張感を少し和らげることができる。
- これまでに寄せられた相談内容を4コマ漫画形式で載せる。相談したいと思っている人と同じ悩みを持っている安心感を与えられる。
- 一定の周期で4コマの内容も変えられるとよいかもしれない。

**相談カードの使い方**

- よく子どもたちに無料で配られる電話番号と「困っていたら相談してね!」とメッセージが書いてある相談カード。これはむしろ逆効果になっているかもしれない。電話番号だけ書いてあっても電話しづらい。裏面に LINE の QR や、「雑談も OK」と情報を載せて連絡しやすくする。

**市政提案会の来場者コメントの抜粋**

- 広報を中高生に任せるのは良いかもしれない。
- スマホを持っていない中高生もいると考えると紙媒体がないとフェアじゃない。
- 相談相手のプロフィールは写真じゃなくても、似顔絵でも OK! 雰囲気とかがわかると良いかも。
- みんなのスマホに情報が届くようにできたらいい。

**市政提案会での来場者とのやりとり**

Q: 予約ってできた方がいい? それとも、フラッと来て話せる方がいい?

→ A: 「どっちか」ではなく、「どちらもできる」が理想かも。

Q: 4コマ漫画は誰が描くの?

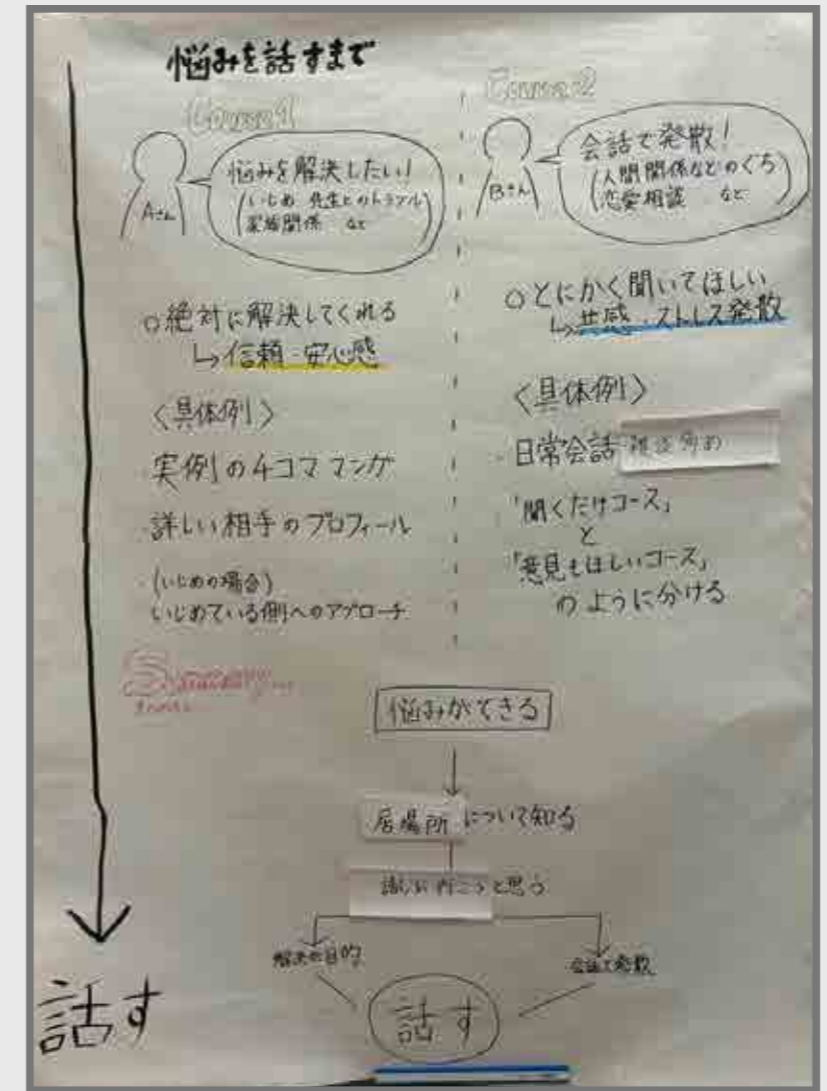
→ A: 広報や宣伝する人の中に漫画を描ける人がいるのではないかな。

Q: 4コマ漫画には何かこだわりがある?

→ A: 親近感が欲しい!(相談するか悩んでいる人に対して)「こんな相談でもしてもいいんだ!」と思えるようなもの。

### 提案内容補足②

居場所につながったあとは、それぞれの目的に応じて過ごしていくことを提案している。多くの中高生は話を聞いて欲しい、共感して欲しい気持ち強いと思うが、「相談」を必要としている人は周囲にバレることなく、相談につながっていく仕組みを作る必要がある。



**最初の入り口はどうしたら?**

- 悩みを抱えて相談したい人も、そうじゃない人もどちらでも利用できる場であることが重要。
- 居場所につながっている人でも気軽に相談できるように、匿名で連絡できるLINEやチャットを活用する。(電話だと内容を親に聞かれてしまう可能性がある)
- 最初はニックネーム等名前を伏せている状態でも相談できるようにする。

**相談につながる過程**

- 「会話をしながら発散していくような場合」と「悩みを解決するために相談したい場合」でコースを分けるようなイメージで相談内容や質に応じて対応を検討する。
- 相談する前段階として、書きたい人は事前アンケートを記入する。(※書くか書かないかの選択は支援者ではなく、中高生自身が行う)
- いじめなど相手がいる問題については、相手側に対してのアプローチも必要となってくる可能性がある。

**市政提案会の来場者コメントの抜粋**

- 電話は顔が見えないメリットもあるのではないかな?
- 「悩みがある人来てね!」と言ってもこないのが事実。ハードルが高いのだろうな!
- 「解決したい」と思っている相談でも、会話の中で解決していることも多いかもしれない。境界線は曖昧だと思う。
- 事前アンケートめっちゃいい! すぐにでも使えそう!
- 事前アンケートで聞きたいこと参考になりました。

**市政提案会での来場者とのやりとり**

Q: コースの設定は最初からすべきだと思う?

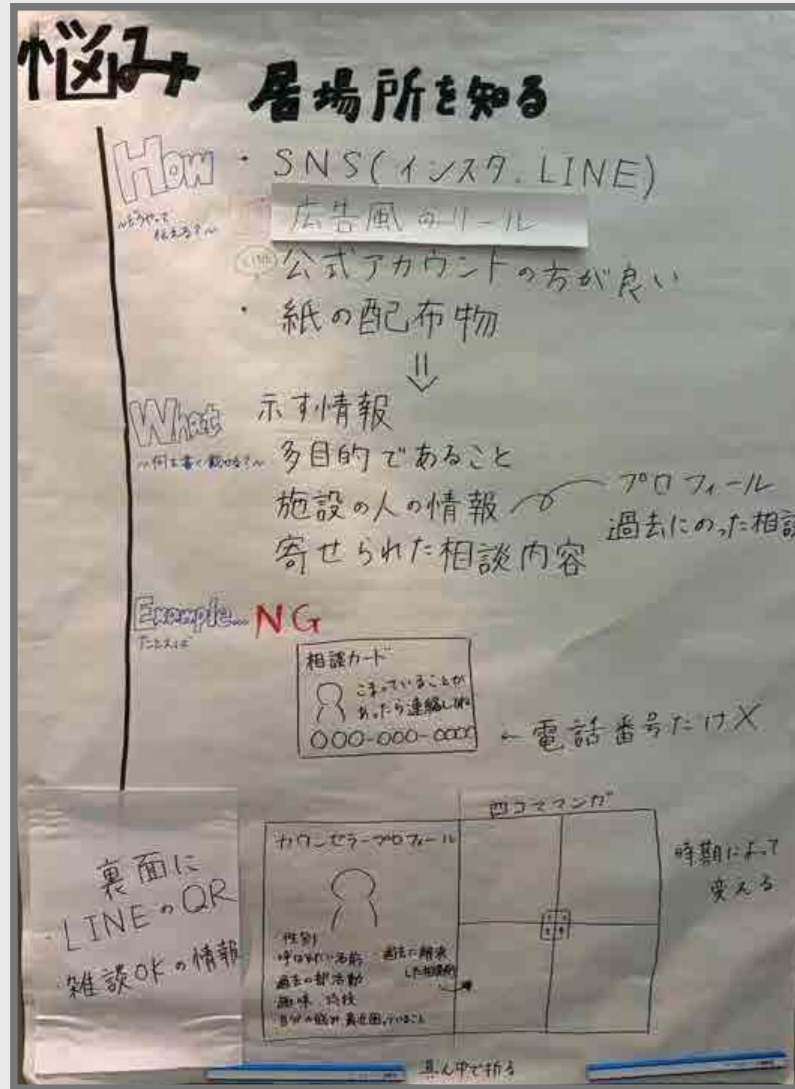
→ A: 途中で変わることもありだと思う。

Q: 連絡手段って何がしやすい?

→ A: LINE やチャット! 電話は使わない! すぐに答えなきゃいけないプレッシャーがある!

### 提案内容補足③

このグループは中高生にとって理想の相談環境を提案している。既存の施設ではなく、新しいイメージを提案している。中高生自身が困っていることや課題と感じている要素を取り入れながら作ったものなので、今後実現されていくことに期待したい。



#### 相談相手も多様な人が理想的

- ・ 悩みや葛藤が多岐に渡るため、年齢、性別、職種も違う幅広い相談相手がいって欲しい。
- ・ 「うんうん！」って聞いてくれるだけで良い場合もあるし、専門家ではなく普通の人の意見が聞きたい。
- ・ 年齢が近い大学生くらいの方が相談しやすい。
- ・ 相談員の方から話しかけて欲しい。
- ・ 1対1が苦しい時と、1対1が必要な時がある。
- ・ 相談相手がどんな人なのか、何が出来る人なのか知りたいので、わかるようにして欲しい。(プレイスにあるプロフィールシートのようなもの)
- ・ 同年代の人と話すか否定されそうで怖いので、大人の人に相談したい。

#### 利用できる時間

- ・ フィールドワークで見学した「まもルーム」と「みらいる」は閉まる時間が早く、部活に参加している中高生は利用できない。  
※まもルーム：月・火・水・金 13:00～17:00  
※みらいる：月・火・水・木・金 14:00～18:00
- ・ 中高生誰もが利用できるように、利用できる時間を延長して欲しい。(理想としては20:00～21:00くらいまで)

#### アクセス

- ・ 中学生が利用することも踏まえて、居場所は駅から近く、アクセスしやすい場所にして欲しい。
- ・ 武蔵野プレイスやコミセンといった既存の施設を活用することができれば、親にも相談しにいけないことがバネない。

#### 目的に応じた場所の活用

- ・ 居場所には複数のフロアが必要で、目的に応じて自由に行き来できるようにする。
- ・ 重い相談と軽い相談でフロア(場所)を分ける。
- ・ 1階を多目的スペースとすれば、来ただけでは相談を目的としていることは周囲からは気付かれない。
- ・ 広く、ゆったりしたスペースが欲しい！

### 市政提案会の来場者コメントの抜粋

- ・ 相談していることがバレないようにカーテン等で仕切る。
- ・ 階(フロア)を分けるのはすごく取り入れたい意見。これが理想だね。
- ・ 権利擁護センターで足りていると思っていた。問題点や伝えたいことよくわかったので、取り組めるように努めたい。
- ・ 縦の関係、ナナメの関係性を人工的に作っていった方がいい。
- ・ 実際、今すぐは難しいけど、考えはよくわかったので、未来の中高生のために作っていききたい。
- ・ コミセンにも応用できる考え方。よく考えられていてとても良い！

### 市政提案会での来場者とのやりとり

- Q: プレイスのカウンターはどう? 個室の方が話しやすい?  
→ A: 個室は話しづらいけど、ある程度プライバシーが守られる必要はあると思う。
- Q: 相談相手について何を知りたい?  
→ その人の職業、経験、その人自身からの一言、名前やニックネーム、顔写真(あった方が親近感が湧く)
- Q: 夜に出歩いている親は心配になるんじゃない?  
→ A: 塾に通っているとそのくらいの時間になるので、問題ないと思う。
- Q: 相談スペースの空きはわかるようにしてほしい?  
→ A: 別の階で時間を潰せるから、わかった方が無駄がなくて済む。

### 市長・教育長の講評

私たちと考えが本当に違うと思ったのは、電話に対する考え方です。我々の世代はLINEなどでテキストを打たなければいけない手間を考えると、電話の方が圧倒的に情報は伝えられていいのかなと思ってしまいます。しかし皆さんの世代にとって電話はハードルが高いという点はこれからしっかり考えたいです。

また、場所についてはやはり行きやすい場所、市役所の中はやはり難しいですね。今後、子どもの権利擁護センターは保健センターに移動することになっていますが、場所がとても大事なということを改めて学びました。3点目、相談相手の多様性についてですが、私たちは相談の軽い、重いに関わらず、とにかく専門家をお願いすればなんとかしてくれると思っていました。子どもの権利擁護センターには、弁護士の方や様々な有識者の方に居ていただいているのですが、もっと会話を含めてフランクな雰囲気から入っていくことが大事だということがよくわかりました。むしろ、専門家だと頭から偉そうなことを言われると面白くないというようなご意見もあったので、非常に考えさせられました。

—— 小美濃市長

話を伺って良いなと思ったのは、相談相手の多様性です。皆さんが求めているのは専門家や権威がある人ではなく、自分ももっと相談しやすい人。相談しやすいというのはその人の職業や年齢ではなく、自分にとってこの人だったら安心して相談できるという人が見つかるかどうかですね。それがすごく大事だと思いました。よく私は学校の朝礼で「悩み事があったら、誰でもいいから先生に相談してください」という話をしてきましたが、そうじゃないということを今日皆さんから教わりました。いきなり相談室に行くのではなく、相談相手の多様性であるとか、会話、雑談から始めること。私はどうしても学校の立場で言っていますが、学校の先生も悩みを聞いてあげるのではなくて、人として対等に皆さんとお喋り、雑談できる空間が学校の中にもできればいいのかなと皆さんの発表を聞いてすごく思いました。今の私の立場から言うと、やはり学校にそういった多様性を皆さんは求めて、期待をしているのだということをすごく感じました。

—— 吉原教育長



## 第4章 事業の実施結果と振り返り

### 1. 今年度事業の実施結果

前述の通り、今年度は武蔵野市から提案に関するテーマを参加者に投げかける形で中高生世代の意見表明に繋がった。2つのテーマから最終的に4つの提案グループが構成され、市政への提言が作成されている。今後、中高生世代の声を市の施策づくり等へ反映していくために、本事業を通して中高生世代からどのような「声」があがったのか、運営事務局として補足して、以下に整理をした。

#### 1. テンミリオンハウスを活用した多世代交流の可能性

このテーマは、健康福祉部高齢者支援課より提示された。「多世代交流」というキーワードは例年繰り返し中高生世代からも頻出しており、「年長者の経験を聞き、進路決定の参考にしたい」という要望は根強い。第

六次子どもプランにおける「子どもと子育て家庭を地域社会全体で応援する施策の充実」・「104世代間交流による地域のつながりと支え合いの推進」にも一部合致するテーマ設定になっている。

- ・ フィールドワーク、議論を行う中で以下2つのグループに分かれて提案作成を行った。
- ・ 一つ目の提案グループは「テンミリオンハウスをスタンプラリーで回ろう」  
より多くの中高生世代に「テンミリオンハウス」を知ってもらい、交流をもっと深めるために出来ることは何かを考えたグループ。普段接する機会のない関わりを生むために中高生世代が「ワクワク」出来る方策としてスタンプラリーの実施を提案した。
- ・ 二つ目の提案グループは「テンミリオンハウスをボランティアで身近な場所に」  
このグループは、テンミリオンハウスが随時

ボランティアを募集していること、一方でそういった募集情報を中高生世代が知らないことを課題として、ボランティアを通じてテンミリオンハウスを知ってもらい取り組みを提案した。

市政提案会では、ポジティブな応答が多かった一方で今後の取り組みに関わるものとして「利用者である高齢者の方のお話が直接聞けていないので、解像度が低く感じた。」「多世代交流なのに、高齢者と中高生しか対象にあがっていないのは少し残念。」といった声があった。この点に関しては、テンミリオンハウス利用者との意見交換が本質として必要である一方で、本事業が中高生世代向けであることから利用者との時間帯の重なり合わせが「交流」以前の時点でそもそもハードルになってしまったことはプログラム編成における今後の課題と言える。

また、多世代交流がテーマとなる際にその都度大人側から聞かれる声として「高齢者との関わりが若者に対してどんなメリットがあるのか(Win-Winである必要性)」「継続的にどうやって中高生世代と利用者の方の交流を持続するのか」というものがある。同様に市長の講評の際に「ケアハウスの運用」に関する言及もあったが、高齢者の声をどこで、どう聴きとるかということ、そして中高生世代と高齢者を「いかに繋ぎ、継続させるか」という役割を担う人材の配置については、事業として(あるいはテーマとして)切り分けて今後検討していく必要があるだろう。

### 2. 中高生世代が気軽に利用できる相談環境

このテーマは子ども家庭部児童青少年課から提示された。武蔵野市子どもの権利条例の策定と連動して設置された「子どもの権利擁護センター」を中心とした市内における子どものための相談機能の充実を図る上でのテーマ提案である。市内施設の移転・建て替えに伴う中高生世代などの居場所の充実(第六次子どもプラン136)、円滑な社会生活・自立に向けた子ども・若者支援(同123)に関連するテーマ設定になっている。

・ フィールドワーク、議論を行う中で以下2つのグループに分かれて提案作成を行った。なお、提案作成の便宜上グループは2つあるが、提案内容についてはそれぞれ独立したものではなく前提となる「信頼や安心」とは何かを一体として考えている。

・ 一つ目の提案グループは「中高生世代にとっての理想の相談環境」

このグループは相談をしたいときに、具体的にどんな環境だったら相談がしやすいかをまとめている。具体的には「場所」「人(相談員)」「時間」の3つの視点で、それぞれ現状の施設にはない(取り入れてほしい)要素を提案した。

・ 二つ目の提案グループは「相談につながるまでのプロセス」

そもそも相談をしたいと思っても、どこに行けば良いの分からない、あるいはどんな人が対応してくれるのか不安…そういった中高生世代の心情・目線で相談者のペルソナを設定しプロセスを追って提案を作成した。

提案会においては、「大人から見た中高生の気持ちと、実際の中高生の考えにギャップがあったことがおどろきだった」という中高生側の声が多かったことが特徴的だろう。「相談するハードルを下げるときの工夫の提案が興味深い」「親バレ、学校バレをととても気にしていることが印象的だった。」「相談することに関するハードルがあることが理解できた。」というような提案会参加者からの応答にもあるように、相談という抽象的なテーマを語る上での前提や目線が異なることが明確に現れたと言える。「人として対等に皆さんとお喋り、雑談できる必要性(教育長)」「電話に対する考え方は本当に違う、そこから考え直さなきゃダメだ(市長)」と教育長、市長のそれぞれの講評でも触れられており、意見聴取を行って行く上で、行政側が時代背景や世代ごとのニーズの変化を継続的にインプットしていく必要があることを示していると言える。

## 2. 参加者にとっての「Teens ムサカツ」事業

参加した中高生世代にとって今年度のTeens ムサカツがどのような体験になったのか、最終回の振り返りレポートから一部コメントを抜粋する。

<学校外の同世代(異年齢)と出会うこと>

- ムサカツを通して同年代の方々の意見を聞いて考えが深まった
- 班のメンバーがみんな優しく、面白くてディスカッションのとき楽しかったです
- 学校ではなかなか出会えなかったような背景をもつ人たちとも交流して楽しかった
- 他の年齢の人との議論を重ねることで、思いつかないような考えや考えられないような視点での意見を聞くことで、自分の活動幅が広がった
- 一番楽しかったのはとにかくみんなと交流できたことで、今まで話したことのなかった初めて会う人たちと仲良くなれたことだと思った
- 違う学校の中高生と関わる機会ってなかなか無いし、たった1個差でも感じていることがまったく違って面白かった
- ムサカツに参加してみて、様々な同年代の人と仲良くなれて良かった。しかし、同じグループの人としか関わらなかったのは少しもったいなかった
- 短い期間の中で、何かをつくりあげる経験はあまりできないので、自分の中で新しいことに挑戦できた機会になった
- 学校外のコミュニティができて、話し相手が

出来たのでこういうコミュニティがいい

<自分の思いを言葉にすること、話しあうこと>

- 普段自分の意見を言語化して伝えるということをあまりやっておらず、あまり意見を言えなかったのでそこは悔しい。周りに年上が多かったので、意見とほぼ同じだし、まず自分にあまり自信がないので全然発言できなかった。次参加するときはもっと自分の意見を他人に伝えられるようになりたい。普段から自分の意見を言葉にする練習をしたら良いのかなと思った
- 実際に提案をしてみて、上手く大人と議論ができなかったなと感じた。自分からもあまり発信できなかったし、相手に何か質問をして受け取ることもできなかった
- 志を持って参加している人が多いため、それぞれ意見をぶつけ合うとそれぞれに磨きがかかって楽しかった
- 去年の参加の時よりも自分で意見を多く言えたかなと思いました
- みんなで意見を出し合って一つのテーマを掘り下げていく大切さを学んだ
- 今年は昨年よりもたくさん意見を出すことができたと思っています。昨年は高校生の方が多く、なんとなく自分の意見が言いづらかったのかもしれないです。今年も高2の方が後輩よりも多く、今もまだ年下感は抜けませんが、責任をもって発言できるようになった気がします
- 自分の思いや主張が他人に伝わるだけでも意味があるんだと感じました
- 自分が「もっとこうしたい!」「こうしてほしい!」という意見を市に発する機会というも

のが今までなかったので今回のこの活動はとても自分にとって学びになった

<市政に中高生世代の声を伝えること>

- 中高生の視点でしか感じるものない要求を大人の方々に伝えることができたと思います。昨年まではプレゼンをしても上手く大人の方々に私たちの意見が伝わっている感覚がなかったのですが、今回の提案会では大人の方々に提案を理解していただき、意見交換ができた
- 去年のムサカツではなかなか大人と分かりあうことが上手くできなかったと感じたが、今年は去年より互いに思うことをぶつけ合い、意思の疎通がとれたと思う
- 市が市民の意見をこんなに採用しようとしてくれていると知らなかったので、小さな声でも届くということを実感できてすごく興味深く、面白かった
- もっと来てくださる大人と交流し、こちらから関心をもって質問してみるのも良かったのかなと思う
- 大人と話す機会が少ないので、ムサカツで大人と話す機会があってよかった
- 大人達が普段どう考えたらあんな施策ができるのかな?と思うことがあるので、とてもこういう機会を設けてくれるのはめちゃくちゃありがたい
- 大人の方々と考え方の違いに気づかされ、私たちにはなかった着眼点で質問が来たため提案会の中でもさらにテーマについて深く理解することができた

## 3. 今年度事業のふりかえりと今後に向けた検討事項

参加人数は昨年度から8名減の24名であった。過去2年度と比べて最小人数となった要因は、紙媒体での広報先の減少や時期や期間が学校行事等と重なっていたなどが考えられる。中高生に向けた周知方法については、本事業に限らず今後も試行錯誤を行いながらデータを集積していく必要がある。

参加者の属性については、中高生の割合が半数ずつ、在住と在学の割合は在住が75%と日頃から「武蔵野市」に馴染みがある参加者が例年と比べて多かった。

最終回に「総まとめ振り返りアンケート」(以下、「アンケート」)を無記名で実施した。24名の全参加者のうち19名(最終回参加者)が回答した。「全5回の満足度」(n=19)については、「満足」が78.9%(15名)、「どちらかといえば満足」が27.1%(4名)であった。

アンケートの「印象に残っているプログラムを教えてください」の質問項目では(n=19、複数回答可)、「提案作成」が57.9%(11名)、次いで「プレ提案会」「フィールドワーク」ともに21.1%(各4名)であった。選択理由としては「自分たちの考えていることを見える化していく過程が楽しかった」「意見をぶつけ合うのが楽しかった」「何をどうすれば分かりやすく伝えるかを話し合うのが楽しかった」などが挙げられている。

前掲の「振り返りシート」の声も踏まえると、参加者にとっては、①企画の参加者や協力者など「人」に出会えたこと、②自分たちで何かやってみるものの難しさや楽しさ、③言葉を紡ぎ伝える大切さなどが特に印象深い経験だったと考えられる。

こうしたアンケート結果も踏まえながら、事業を実施する上で重視したポイント(第1章参照)をもとに、事業のふりかえりを以下の4点に整理した。

### 1. 安心・安全な話し合いの場をつくること

各回のプログラムの参加率は約7割であった。参加率は昨年度と比べさほど変化はないものの、途中辞退者と複数回欠席をした参加者が多くの割合を占めた。特に複数回欠席した参加者は、その大部分が第1回を欠席しており、初回で大切にしている「関係づくり」に関わることができなかったことや短い回数で議論を積み上げていくスタイルでの各回ごとの空白の大きさが複数回欠席の要因となったと推測される。また、今年度は実施期間を前年度の3ヶ月間(11月～2月)から5ヶ月間(8月～12月)に期間を延長した。これは、前年度参加者目線での参加のし易さを意識して期間を圧縮した際に、どうしても運営側の準備における負担(打ち合わせを中心とした事前準備が十分に行えないなど)があったことから1ヶ月に1回のペースでの実施となった。「長期休み中の集中型が良い」という意見もあり、開催時期や期間については継続して検討していく必要がある。

アンケートの「安心してワークや議論に参加できましたか」の質問項目(n=19)では、「安心して参加できた」が84.2%(16名)、「普通」が15.8%(3名)、「安心感を持つことができなかった」の回答はなかった。また、「グループファシリテーターの存在は議論やワークの助けになりましたか」の質問項目については、「とてもあてはまる」および「どちらかといえばあてはまる」が100%であり、回答理由としては、「進行が止まった時に次のステップまで進めてくれた」「思っていることを言葉にできなかったところを何度も助けてくれた」などがあがった。前年度までと同様、グループファシリテーターの存在は非常に大きく、参加者一人一人と関係性を築きながら、安心して話し合いに参加できるような環境づくりができたと言えるだろう。

### 2. 「自分たちの声によって、状況が変わるかもしれない」という体験を通して自己効力感を高めること

前年度同様に、最終回に市政提案会を開催して、「提言」を一方向的に伝えるだけでなく、市長、教育長をはじめとする行政関係者、地域の方と十分に意見交換ができるようにポスターセッションの時間を設けた。アンケートの「自分自身の市政やまちづくりに関する意識の変化について」の質問項目では(n=19、複数回答可)、「参加前より身近に感じられるようになった」が94.7%(18名)、「自らの意見を伝えること、行動してみることがプラスの可能性を感じた」が63.2%(12名)、「特に変化はない」「関わることは難しい/面倒だと感じた」がともに0%であった。当法人が事業運営を担い始めてから3年目で初めて全ての回答者が市政やまちづくりに関してポジティブな印象を持ってプログラムを終えたことになる。選択理由については「大人が積極的に耳を傾けてくれた」「声が届くことを実感できた」「武蔵野市のことについて知ることができた」等が挙がっている。

行政に携わる人と直接話し、伝えられた(伝わった)ことそれ自体を多くの参加者が評価していることが読み取れるが、「意見を伝えることでどうなるのか」という本事業の意義や可能性を参加者に示していくという点においては例年同様に課題は残る。

特に今年度は「市政に反映しやすくする」ことを重視し、武蔵野市から参加者に対してテーマを投げかける形でプログラム運営を行ったことから「フィードバック」の重要性は特に高まっている。今回議論されたことや提言を施策等に具体的に反映させていくには、もちろん一定の検討プロセスと時間が必要であることから、迅速な変化は難しい。しかし個別の提言毎に進捗状況を公開するなど検討プロセスの見える化を工夫していく必要があるだろう。加えて、検討に一定の時間を要することが前提であるならば、同様のテーマであっても定期的にテーマに据えて、その時その時の中高生世代の声を聴き取り続け、情報を蓄積するプラットフォームとしての役割を意識すること、そして必要な時に必要な世代の声を聴きとる機能を本事業より柔軟に実施で

きる制度設計を考える必要性もある。

### 3. 地域資源を積極的に活用し、権利を支える大人を増やすこと

### 4. 市の青少年事業等と情報交換を行い、連携の可能性を模索すること

本事業は中高生世代が武蔵野市について関心を持つきっかけを作ることが目的の一つである。武蔵野市に対する関心を高めるためには、普段接点のない出合いを運営側が意識的に提供する必要がある。今年度に関しては、例年同様にフィールドワークを行うことで中高生世代が実際に見て、知ること。加えて、提案会において行政関係者に限らずより多くの大人と意見を交換する場づくりを行った。中高生世代と大人の意見交換の必要性を感じる一方で、今年度は提案会に参加する大人の数が昨年度に比べ3割ほど減少した。これは単一部署から提示された特定テーマの提案を行うプログラムとなったために、関わる部署やフィールドが減ったことが大きな要因である。「特定の中高生の声を聴く」ことで終わらせないために、そして本事業の価値をしっかりと伝えていくためにも多種多様な大人の関わりが必要不可欠ではないだろうか。

また、今年度は「武蔵野市子どもの権利の日」に合わせたムサカツ関連事業として1日完結型ワークショップ「Youth Idea Session」(担当:子ども子育て支援課)を初めて実施した。このプログラムは当初、単発のプログラムを設計することで本体企画よりも参加のハードルを下げること、そして他の青少年施設との連携実施を狙ったものとして運営団体から提案をした枠組みである。ムサカツ参加者とは異なる層が参加してくれたことで、一定の目標は達成できた一方で、本事業と他青少年施設との連携は十分に行えず、「事業に参加していない同世代の声も聴きとる工夫」を行う上でもまだまだ途上にあると言えるだろう。



## 第5章 人材育成

### ファシリテーターの研修体制について

第1章の「運営体制」に記載の通り、本事業の実施にあたりグループファシリテーターとして実施団体職員1名を含む計12名配置した。参加者と年齢の近いスタッフが話し合いのサポート役を担うことで、参加者との関係づくりや意見を言いやすい雰囲気をつくることを期待したため、ファシリテーション経験の有無を問わず、概ね30歳以下の方を募集した。

昨年度から継続して本事業のグループファシリテーターを担う学生は5名いたものの、ファシリテーションの経験が無い学生も参加しており、子ども主体、あくまで参加者の意見表明を尊重することに重きを置く事業の性格を踏まえて、以下の研修を実施した。

#### ① 「子どもの声を聴く ～子どもの権利とファシリテーション～」

日時 2025年8月2日(土)

講師 山本 晃史 さん (株式会社C&Yパートナーズ)

##### 実施目的

- ・現在の社会情勢を踏まえて、子ども・若者の意見表明や社会参画の意義について知る
- ・ユース(子ども・若者)の伴走者(ファシリテーター)としてのマインドとスキルを学ぶ
- ・子ども一人ひとりの声を尊重し、テーブルファシリテーターとなつて子ども意見聴取の場を運営することができる

##### 実施内容

###### 座学

- ・「子どもの権利について学ぶ」
- ・「伴走者(ファシリテーター)としてのマインドとスキルを学ぶ」

###### ワーク

「ロールプレイを通して、ファシリテーターとしての問いかけのコツやポイントを実践してみる」  
「昨年度もグループファシリテーターとして参加した学生の声をもとにポイントを抽出する」

#### ② 「グループファシリテーター中間振り返り」

日時 2025年11月15日(土)

講師 鈴木 綾 さん (NPO法人こおりやま子ども若者ネットワーク)

##### 実施目的

- ・年間5回のワークショップのうち、前半3回が終わった段階で、それぞれのグループファシリテーターとしての関わりを振り返る。
- ・後半2回に向けて、ファシリテーターとして「何を大事にどんなアクションをしてみるか」を意識化する。

##### 実施内容

###### ワーク

「今年度のワークショップの”ゴールイメージ”を、参加者・大人・ファシリテーターの視点で出しあう」  
「KPT法を活用して、Keep(継続)、Problem(課題)、Try(改善)の3つの項目に分けてこれまでのファシリテーションを振り返る」  
「ファシリテーターとして大事にしたいこと、トライしたいことを整理する」

その他、

- ・ファシリテーターの複数配置による小グループ内でのフォロー体制づくり
- ・団体職員をメンターとして、必要に応じてアドバイス、サポートの実施
- ・段階的な役割の拡充による負担軽減

によって、グループファシリテーター自身の参加に無理がないように適宜調整を行った。また、実施団体の基本方針として事前ミーティング及び事後のふりかえりを大切な研修の機会と捉えており、事前ミーティングにおける各回の目的やワーク内容の理解と疑問点の整理による主体的な参加を促すとともに、事後のふりかえりにおいては、「安心・安全な話し合いの場」をつくることを一義としながら、子どもたちとどのような関わりが必要か、ファシリテーターとして大切な視点の検討・共有を行った。

## グループファシリテーター 振り返り

昨年度から続けてサブファシリテーターとして参加し、加えて他のワークショップで類似する活動を行って、ムサカツ自体に対する個人的な捉え方にも変化があった。ムサカツはファシリテーター同士のディスカッションが多くとられており、その時間で言語化する過程がかなり重要だという点である。今回のムサカツでは特に、中高生の本音を探るためにファシリテーター側が付箋をあらかじめ見直し、キーとなる考えはどれだろうかと深堀りをした。私はこの時間がなければ自信をもって進行することはできなかったし、自分の脳内の刺激にもなった。一方で、かなり中高生側をアシストする要素にはなったので、自分の中で整理するものと中高生に対して発するものをしっかりと分けなければならぬと感じた。また、ムサカツの連続性にも興味を持った。今回、昨年度までの中高生メンバーのファシリテーター側としての参加もあり、「来年はファシリテーター側」と宣言した高校生もいた。中高生側で

自分の意見を出し、大学生からは意見のサポートを行うという流れでムサカツに関わるという構造は、ムサカツが続けば続くほど特徴的なワークショップになっていく部分な気がするし、参加者にとっての対話のための包括的なトレーニングになるようにも考える。

ムサカツは、中高生だけでなく、ファシリテーターも一緒に創り上げていく場なのだと強く感じた。

(所属:成蹊大学)

私は、ムサカツに中学三年生の時に初めて参加してから今年で五年目を迎えました。高校三年生までの四年間は、参加者側として、まず「武蔵野市に子どもの権利条例を作る」ことをテーマに取り組みしました。なかなか意見がまとまらない状況が続きましたが、最終回の市長提案会が迫ると、メンバー皆の団結が強くなり、納得のいく提案が出来たことが印象に残っています。話し合いが上手く行かないときに、ファシリテーターが話し合いをスムーズに進められるようにサポートしてくれたからこそ、良い市長提案が出来たと感じており、毎回サポートしてくれたファシリテーターには、とても感謝しています。そして、大学に入学したらファシリテーターとしてムサカツに携わり、今までの恩返しをしたいと思っていました。

今年から念願のファシリテーターとしての参加で、テーマは、「相談」と「多世代交流」でした。私は、「相談」チームに所属して約半年間活動を支援してきました。学年が全く違うメンバーが集まり、相談しやすい「場所」、「人」、「時間」についての話し合いを行いました。メンバーの話し合いがテーマから大きく外れて来た時には、テーマに沿った話し合いに戻せるようサポートしました。話が止まってしまった時には「こういう案は?」とか、話し合いの中で中々自分の意見を述べられていない子には「どう思う?」などと投げかけました。参加者として参加した時に助けられたことを思い出しながら、活動できたと思います。

(所属:東京医療保健大学)

私が担当した相談グループでは、気軽に悩みや相談ができる居場所とはどのような場所かというテーマについて考えました。学生たちは、当事者として、どんな施設なら行きやすいか、どんな相談員なら話しやすいか、どのようなつながり方なら安心できるかを真剣に考えていました。自分自身の経験に基づく意見だけでなく、いじめや家庭の問題を抱える人、スマートフォンを持っていない人など、自分とは異なる立場の人にも思いを巡らせながら、より多くの人々が利用できる相談の在り方を模索していた姿が印象的です。

また、休憩時間や活動前後の時間に、学生たちと学校の悩みや恋愛の話、たわいのない雑談をする中で、こうした何気ない交流こそが、実は学生たちが求めているものなのではないかと感じるようにもなりました。個人化が進み、他者との関係を自分で選び取らなければならない現代において、人間関係は自由である一方、不安定さを抱えやすくなっています。そんな現代を生きる子ども、若者たちにとって、ムサカツのように、立場や目的は違っていても自然に集い、対話し、関係を築ける場所のものが、ちょっとした心のよりどころになっているのではないかと思います。

全体を通じてムサカツは、単なる提言活動にとどまらず、学生たちが自分の気持ちを言葉にし、誰かと共有し、他者とながらることができる居場所でもあったと感じました。その一端に関われたことを、とても嬉しく思います。

(所属:早稲田大学)



## 第6章 参考資料

「公園」に関する中高生世代の声  
発表スライド  
来場者アンケート  
令和7年度総まとめ振り返りアンケート

初回のワークショップで、市役所の各部署から中高生世代の声を聞きたいテーマ(候補)を提示してもらい、意見交換を行った。その中で、「中高生世代が利用しやすい公園」(緑のまち推進課)というテーマについて、参加者から「公園での過ごし方」と「さまざまな声(補足説明、使いづらいポイント、こんな公園あったらいいな)」を聴きとった。以下、運営事務局で項目立て(A~D)を行い、意見交換の内容を紹介する。

### A) おしゃべりをする

#### 【付箋に書かれた過ごし方】

「おしゃべり!」「ベンチでおしゃべり」「お金がないときにおしゃべり」「友達としゃべる(第二しろがね、第三しろがね、遊具に乗りながら)」

#### 【意見交換での発言メモ】

- ・「大人数で」「長時間(時間の制限がなく)」「お金がかからない」過ごし方ができるのは公園しかない。
- ・お金をかけずに長時間いられるのは図書館か公園。さわげるのは公園だが、夏と冬はいかない。
- ・おしゃべりの時間は、たとえば夕方4時~7時とか。早朝~お昼までとかも。向かい合わせのベンチに座ったりしておしゃべり。
- ・公園の「はしご」もする。たとえば、市民公園のブランコにのっておしゃべりして、ずっとそこにいると小さい子が使えなくなってしまうから、そのあと別の公園に移動したりする。途中で暑いからエコリゾートに入ったりもする(コミセン的な使い方)。一方で、めんどくさいから同じ公園にずっと

いることも。

- ・おしゃべりしたいというのとスポーツをしたいというのと、同じ公園で両立するのは難しい。
- ・夏は暑いし虫がいるし公園は行けない。代わりに通話でおしゃべりしたり、買い物しながらしゃべったり。
- ・公園のベンチに屋根がほしい。
- ・ベンチ自体が暑すぎて座れない。
- ・ベンチの真ん中にひじかけがあると話がしづらい。寝たい時も寝転がれない。
- ・公園にテーブルがない。あっても小さい
- ・衛生面(トイレ)は心配。長時間はいられない。

### B) あそぶ

#### 【付箋に書かれた過ごし方】

「コンビニでアイスとお菓子を買って食べる」「友達とバドミントン」「水遊び」「写真とる!」「動画をとったりする(踊ってみた・ふざけたやつとか)」「ひまつぶし」「寝る」「集合場所にする」「登下校で通る(雪の日とか紅葉のときとか)」「お花見する」「近所のわんことあそぶ」「ピクニック@中央公園」「井の頭公園で花火」「ボートに乗る(井の頭公園)」「すべり台の下でゲーム(小学生)」「遊具でおにごっこ!(小学生)」「四つ葉のクローバー探し(小学生)」「井戸で遊ぶ(小学生)」

#### 【意見交換での発言メモ】

- ・「すべり台の下」は暑いから。そこしか日影がなかった。
- ・草が多すぎるのは使いづらい。水道がちゃんとあるのは便利。
- ・テスト期間の気晴らしとかで行く。

- ・小さすぎる公園は行ってもやれることがない。
- ・本当は遊具で遊びたいけど(ブランコとか)、対象年齢じゃいから壊れるかもと思って使ってない。
- ・中高生用の遊具がほしい(だいたい12歳まで)。ジップラインとか。
- ・自分たちも遊びたい!小さい子どもにはゆずるし!
- ・小さい子にぶつかったら危ないから大きく動きにくい
- ・公園で遊ぶと小さい子のジャマになってしまうから遊ばない。
- ・「子ども(小中学生)の遊び場」感があって、高校生は行きづらい。
- ・何もない広い公園だと小さい子もあまりいないので思いっきり遊べそう。
- ・小学生が多いから占領したら申し訳ない。
- ・中学生も「遊具おに」はするけど、配慮してる(本当は思いっきりあそびたい…)
- ・花火ができる公園が近くにない。
- ・音楽を流しても気にしなくていいくらい広い場所があるといい。
- ・公園にいく「きっかけ」があるといい。フォトスポットがあるといい。花火みたいなイベントがあると公園に行くきっかけになる。
- ・コンセプトのある公園だと興味がわいて行く。府中にある「交通公園」とか
- ・年齢別の公園(時間帯分けるとか?)があるといい。
- ・周りに住んでいる人がやさしいといい。そうじゃなくて使えなくなったことも。
- ・「変な人」がずっといる公園があって使いづらい。
- ・小中と私立なので、近くの公園で遊べる友達がいない。

### C) 運動する

#### 【付箋に書かれた過ごし方】

「散歩」「気分転換で汗をかくため(テスト期間とか)」「バスケの練習」「早朝にランニング」「学校行事の持久走の練習」「ラグビーの練習(中央公園)」「トラックで走る(井の頭公園西園)」

#### 【意見交換での発言メモ】

- ・バスケのゴールがない。(サッカーとかほかのスポーツも)
- ・走る時に、だいたい「〇〇m」という看板があるといい。

### D) 学校の作業をする

#### 【付箋に書かれた過ごし方】

「学校の何かの準備系(ダンスのテストの前とか)」「体育祭や文化祭の準備や練習」「学校の授業とか(自然観察)」

#### 【意見交換のメモ】

- ・学校の最終下校が過ぎたあとに、そのまま近くの公園にいて続きの作業をする。コミセンを使うこともある。コミセンか公園くらいしかない。

### 多世代交流 | Aチーム

発表用スライド

テンミリー  
～スタンプを添えて～

～なぜこのような活動を?～

- ① 多世代との交流をもっと深めてもらう。
- ② 「テンミリオンハウス」の存在を知ってほしいから。

～具体的な提案内容～

各テンミリオンハウスを  
スタンプラリーで回ろう!!

～スタンプラリーの内容～

選択1  
一か所のテンミリオンハウスに何回か行って  
もらい各週のイベントに参加してもらう。

選択2  
武蔵野市の中にあるテンミリオンハウス7か所  
にそれぞれ行ってイベントに参加してもらう。

↓

夏休みの2日間

～報酬内容～

1の選択の場合  
二日合計で何回イベントに参加したか

2の選択の場合  
二日間合計で何か所周ったか

↓

QUOカードを与える

発表原稿

### 提案のキャッチフレーズ テンミリー ～スタンプを添えて～

【提案の背景】

なぜ私たちがこのような提案をするのかという理由は二つあります。一つ目は、多世代との交流をもっと深めたいということ。二つ目は、「テンミリオンハウス」をもっとよく知ってほしいということ。この二つのことがこの活動をしている理由です。

【提案の内容】

具体的な提案内容としては、各テンミリオンハウスを回るスタンプラリーを行います。でも、ただスタンプを押すだけでは、多世代交流につながらないので、各テンミリオンハウスで「ミッション」を設定します。ここでいう「ミッション」とは、それぞれのテンミリオンで日々行われている様々なイベントに参加してもらうことを考えています。武蔵野市内のテンミリオンハウスを歩いて回るのとはとても大変なので移動手段はバスや電車の利用も可にします。ただ、武蔵野市内のイベントなので、バスはムーバスの利用を推奨します。

【提案の詳細】

ではいつ?どんなふうに?という細かいスタンプラリーの内容としては、今の段階としては二つの方法を考えています。一つ目のやり方は、一か所のテンミリオンハウスに何回か行ってもらうイベントに参加してもらう形です。この方法では、南海も同じ場所に訪れることによって、同じ人たちと何回も交流することができます。テンミリオンハウスに来られる方たちは皆さん地域の方々たちなので、形ははっきりしなくともまずは利用者の方と関係性を築くことができます。二つ目のやり方は、武蔵野市内にあるテンミリオンハウス7か所をそれぞれ行ってもらうイベントに参加してもらう形です。この方法では、武蔵野市内のそれぞれのテンミリオンハウスについて「まず知ってもらう」ということが可能になります。

開催期間としては「夏休み(長期休み)の2日間」がいいと考えています。長期休みということもあり、中高生世代のほかにも幅広い年代の方に参加していただくことができ、武蔵野市内と考えると1日ではキツイという面から2日間という形がいいと考えました。

最後に、参加するにあたって最終的なゴールとして「報酬」があると中高生世代の参加を促すことができます。「報酬」としてはQUOカードを考えていて、先ほどの一つ目の方法の場合、合計何日参加したかによって判断して、二つ目の方法の場合、いくつのテンミリオンハウスを回ったかによって判断します。

### 多世代交流 | Bチーム

発表用スライド

テーマ  
テンミリオンハウス  
をボランティアで  
身近な場所に

【背景・課題意識】

- 興味があるけど勇気が出なくて来れない人がいる。
- どんな雰囲気で行っているのかわからない
- 配膳などの手伝いと一方的だから、もっと関わりたい

【提案内容①】きっかけ作り

- 学校でチラシを配る  
↳ 友達を誘いやすい
- 市報に過去の参加者の感想を載せる
- ポスターを貼る(置く)  
例: スーパー、掲示板、駅、学校

【提案内容②】活動内容

3本の軸  
利用者さんとかかわる「実感」を得られる

一緒にする 昔遊び <small>昔遊びは、利用者さんとの距離感がつかめて話しやすくなる</small>	教えてもらう 体験した歴史 <small>体験した歴史は、普段の生活では考えないことを考える機会になる</small>	教える 最近の技術 <small>最近の技術</small>
---	--	-----------------------------------

参加する上でのこだわり

- 参加しやすい長期休みに開催してほしい
- 友達と一緒に参加したい
- 利用者さんと対等に話したい
- プログラムが前もって決めてあったほうが参加しやすい

発表原稿

### 提案のキャッチフレーズ テンミリオンハウスを ボランティアで身近な場所に

【提案の背景】

このグループは、テンミリオンハウスでの多世代交流について、興味があるけど勇気が出なくてボランティアなどに来られない人がいる、という課題があると考えました。参加しづらい理由としては、テンミリオンハウスがどんな雰囲気で行っているのかわからないこと、どんな人と関わるかイメージがつかないこと、中身が配膳など一方的なものだと関わりづらいなどがあります。先程のグループに、ボランティアに興味を持つきっかけを持ってもらうための発表(スタンプラリーの提案)をしてもらったので、自分たちのようにボランティアにある程度興味を持った人達を対象にすることにしました。

【提案の内容】

まずはボランティアの情報をそもそも知らないことが多いため、きっかけ作りが必要です。一つ目は、学校で配るという方法です。学校でチラシを配れば、それを見せて友達を誘いやすい上、親にも「これに行ってくるね」と気軽に言いやすいです。さらに、市報などを見ない人にも情報が届きやすいという大きなメリットがあります。二つ目に、市報などに過去のボランティア等の参加者の感想を載せることです。感想を載せることで、ボランティアの活動内容だけでなく、テンミリオンハウスの雰囲気を知ることができる。三つ目に、スーパー、掲示板、駅などのたくさんの人が目につく場所にポスターを張ることです。SNSだと市のアカウントなどをフォローしている人にしか情報が届きませんが、ポスターだとふとした瞬間にたくさんの人の目に付くようになります。

【提案の詳細】

具体的な活動内容は、利用者さんと一緒にする、利用者さんに教えてもらう、私たちが教える、の三つがあります。例えば、編み物や書道などテンミリオンハウスで行っているプログラムと一緒にやると、利用者さんとの距離が近くなって話しやすくなります。また、昔遊びや体験した歴史などを教えてもらうと、普段の生活では考えないことを考える機会にもなります。さらに、私たちがChatGPTや、LINEなどの使い方を教えてあげることでもできるかもしれません。そのような活動もしながら、お昼ご飯の配膳や片付けなどのお手伝いもできたらいいです。このような活動を通して、利用者さんとかかわる「実感」が得られるといいと思います。最後に、私たちはテンミリオンハウスにあまり関わりがなく、何をしたらテンミリオンハウスにいる方々が喜んでくれるのかわからないため、やるのが前もって決めてあった方がボランティアに参加しやすいです。また、一人で参加するのはハードルなため、友達と一緒に、夏休み期間などに参加できると嬉しいです。

相談チーム

発表用スライド

発表原稿



**【背景・課題意識】**

- ・気軽に利用、相談ができない。
  - 学校の先生、親に知られたくない
  - 悩みの背景を説明するのが面倒
  - 空気が堅そう...
  - 本当に解決できるのか？という不安
- ・行きにくい
  - ・ 利用時間が短い
  - ・ 親近感を抱きにくい相談員
  - ・ 場所が遠い

**【具体的な提案内容】**

☆「悩みを話す」目的で行くのではなく、「会話・雑談」を目的として居場所へ行き、その先で悩み相談につなげる！



**具体的な説明はポスターセッションにて！**

Aグループ プロセス	Bグループ 環境
---------------	-------------

提案のキャッチフレーズ  
信頼・安心からはじまる相談を

【提案の背景】

背景・課題意識については、大きく二つに分けました。一つ目は相談するまでの過程、二つ目は具体的な相談場所(環境)についてです。  
武蔵野市には、既にいくつかの相談窓口がありますが、中高生からは「利用じかんが短い」、「カウンセラーに親近感を抱きにくさ」、「場所が遠い」などの理由から中高生が利用できておらず、「もっと気軽に利用したい」という意見が多く出ています。  
また、相談場所につながるまでの過程に関しては「相談内容を親に知られたくない」、「悩みの具体的な内容や背景を説明するのが面倒」、「相談場所の空気が堅そう」、「本当に解決できるのか」といった不安が多く聞かれました。

【提案の内容】

そこで、私たちは「悩みを話す」目的で相談窓口に行くのではなく、「会話・雑談」を目的として居場所へ行き、その先で必要に応じて悩み相談に繋げる空間づくりを提案します。

【提案の詳細】

このスライドでは実際に考えている様子を載せてみました！  
みなさんにとっては小さな悩みでも、中高生にとっては大きなものです。かつて、夏目漱石は「人間は迷う存在である。迷わなくなったら、人間ではない」と言いました。悩むことに対して肯定できるような居場所を作れるようにしたいと考えています。  
ここまで発表してきましたが、具体的な内容はまだお話しできていません。5分以内に伝えるのが難しかったので、次のポスターセッションで中高生からの意見を聞き、たくさん疑問をぶつけて欲しいと思います！

「テンミリオンハウスを活用した多世代交流」の提案へのコメント

<スタンプラリーに関する提案について>

- ・スタンプラリーという具体的な提案で、実現可能ではないかと思いました。
- ・テンミリ側の受入体制やプログラムが中高生に刺さるかどうかが鍵かなと感じました。
- ・テンミリオンの位置をムーブス等の公共機関のアクセスマップ(融合版)をつくってみてはどうでしょうか？
- ・学生の方からプログラムを提供するとやりとりが双方向になっていいと思いました。(スマホの使い方を教えるなど)
- ・中高生世代への周知の一環
- ・継続性が課題(高齢者との関わりが若者に対してどんなメリットがあるのか)
- ・ムーブスの利用を促すような地域への興味を沸かせる工夫が良いと思いました。
- ・スタンプラリーなどは入口であるので、継続性を考えたときにテンミリの食事券を複数枚発行して友だちと一緒に来られるようにして継続性を持たせるようにしたい。
- ・多世代交流のテーマでも、スタンプラリーやテンミリでのイベント参加で周知を行うことで、親しみをもってもらい、その後も学校を巻き込んで職場体験的な関わり方ができると継続性が生まれると思う。

<ボランティアに関する提案について>

- ・活動内容の三本の軸がよく考えられていて素晴らしい提案だと思いました。
- ・興味があまりない中高生に対して参加するメリットを打ち出せるとなおよいと思いました。

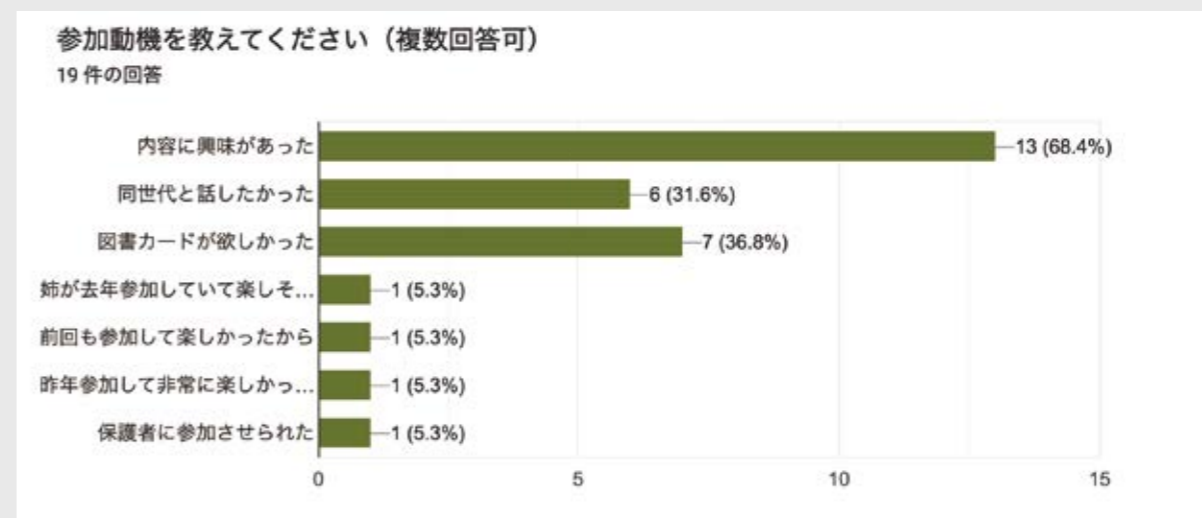
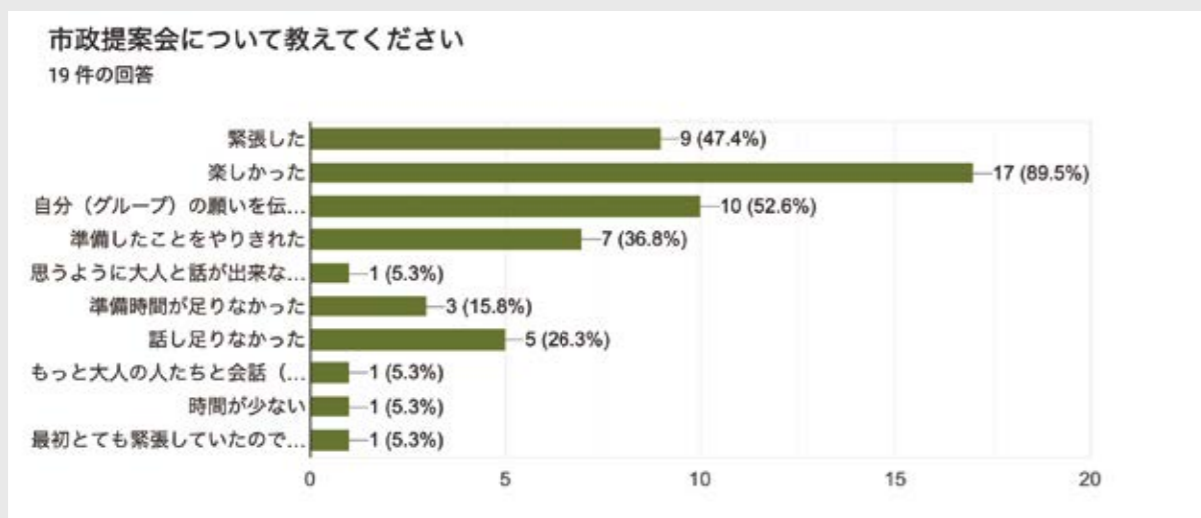
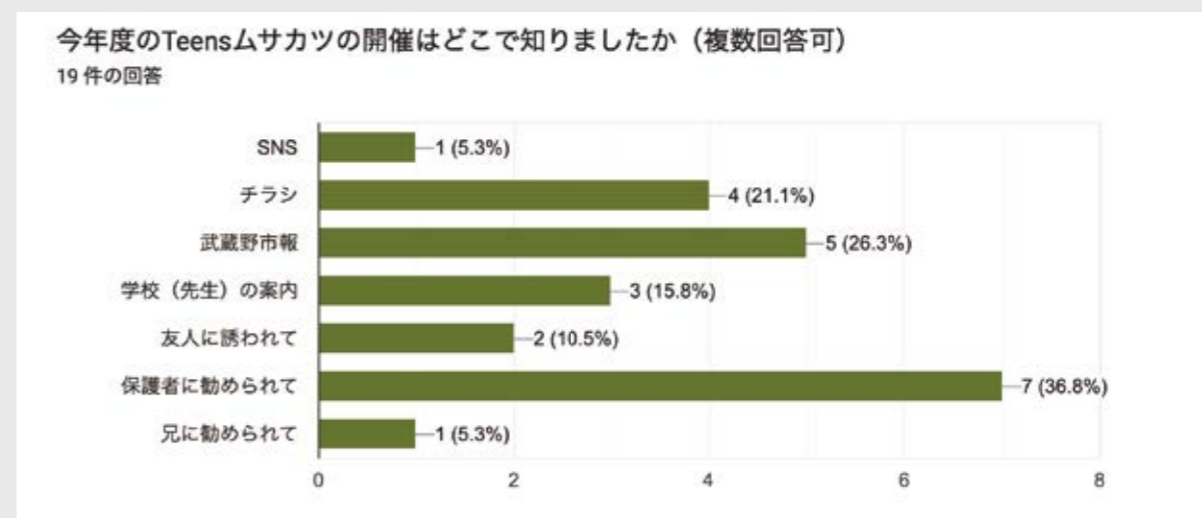
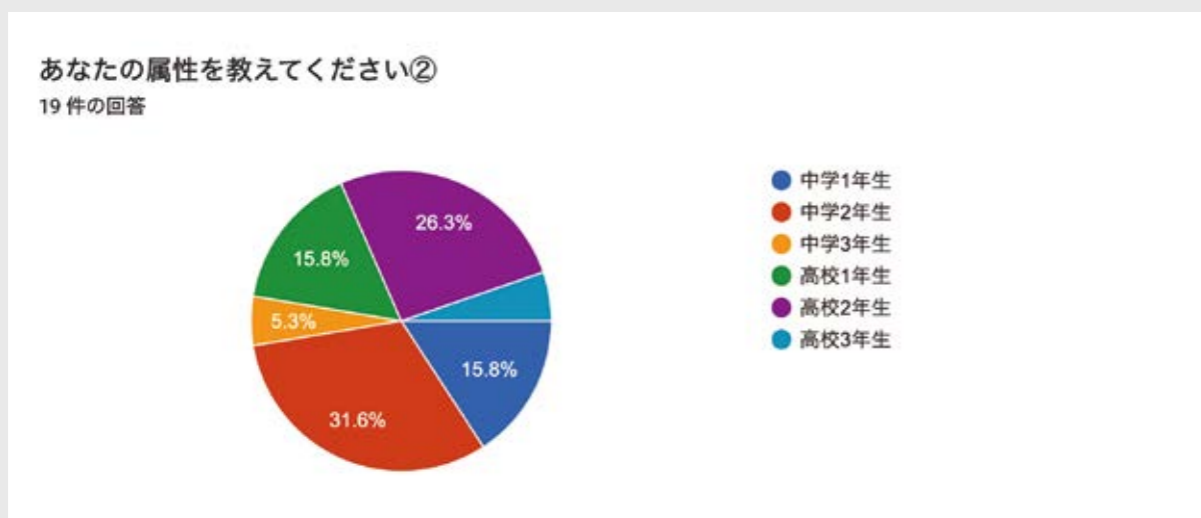
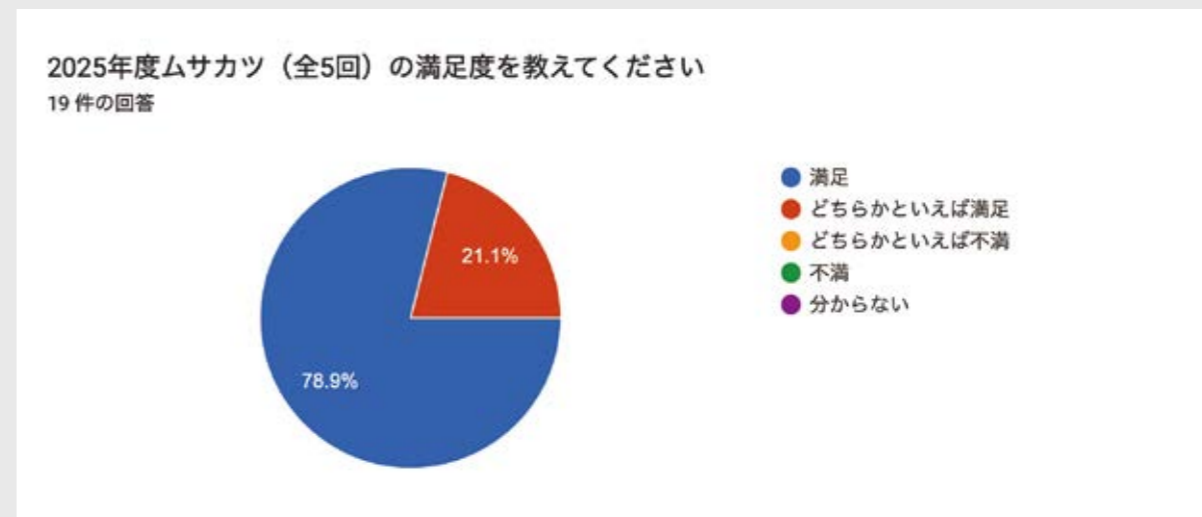
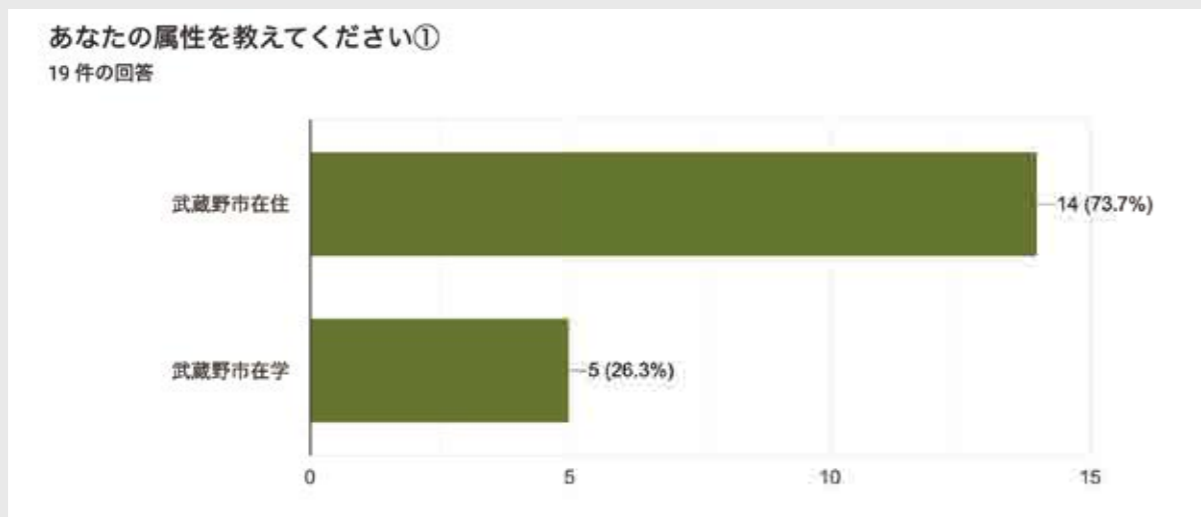
- ・今回はテンミリオンハウスのお題だったかもしれないが、プレイスの立場からすると、市民活動団体にとっても"一緒に"とか"若者から高齢者に教える"ことが求められていることだと思った。
- ・一度のみのイベントとするのではなく、お互い楽しみながら教え教わる関係が地域でできると良いと思う。
- ・テンミリオンの方は、利用者である高齢の方のお話が直接聞けていないので、その解像度が低く感じました。多世代交流なのに、高齢者と中高生しか対象にあがってないのは少し残念でした。
- ・コミュニティセンターもそのような機会の周知場所の一つに入れてほしいです(チラシ、ポスター、コミセン便り<毎月発行>)
- ・おばあちゃんおじいちゃんの悩み、やりたいことを傾聴してみたらどうでしょうか？
- ・学生は平日は参加できないので、長期休みにテンミリオンハウスに行けるようにするのは交流の機会を広げるのにいいと思いました。中高生も意外と市報は見ている。友だちにはチラシだと共有しやすい。
- ・中高生、高齢者双方にメリットがあるプログラムを組むという点で、スマホ操作を教える、麻雀を一緒にしてワザを教えてもらう、というプログラムは良いと思う。
- ・今はチラシを市立校ではデータ配信に変わってしまっているが、やはり紙で配られた方が友だちとそれを見ながら話せて良いという意見が参考になった。
- ・生徒に知らせるには紙チラシが効果的。
- ・中高生が行くメリットを示せるのは良い
- ・Chat GPT, LINEの使い方を中高生が教えるという身近なボランティアが良いと思いました。

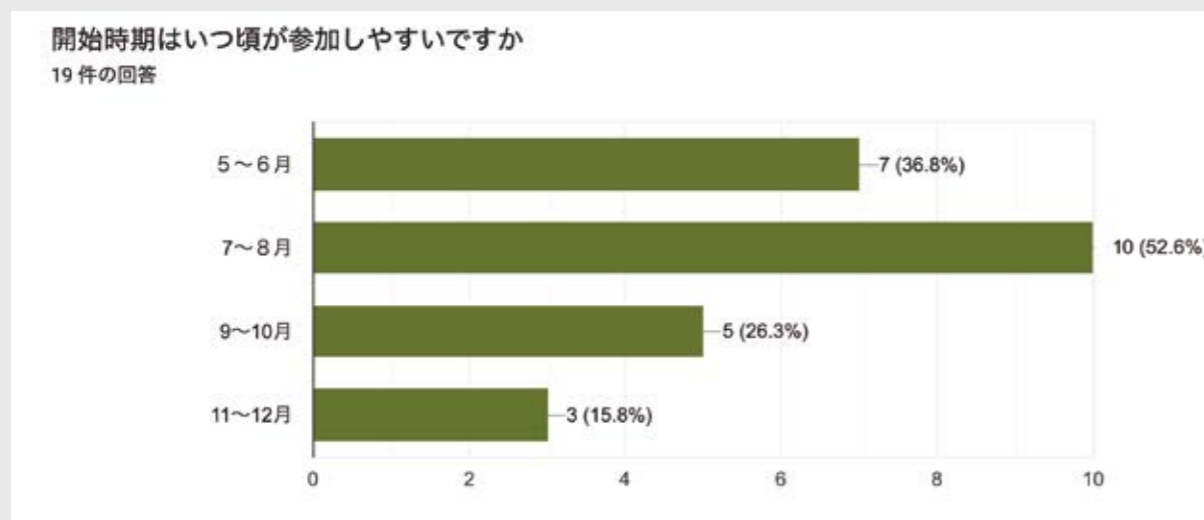
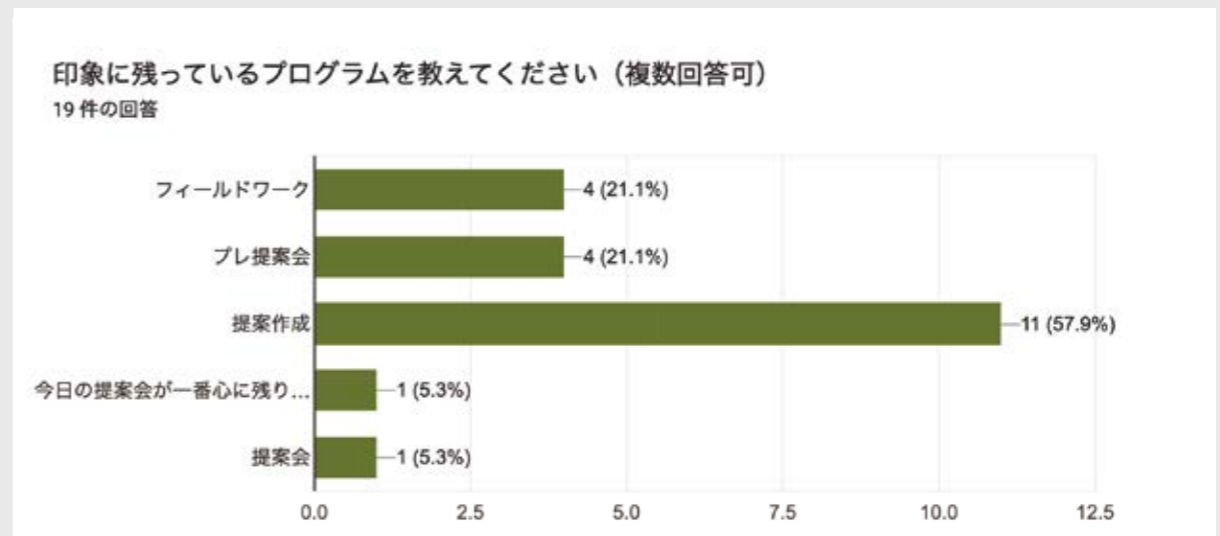
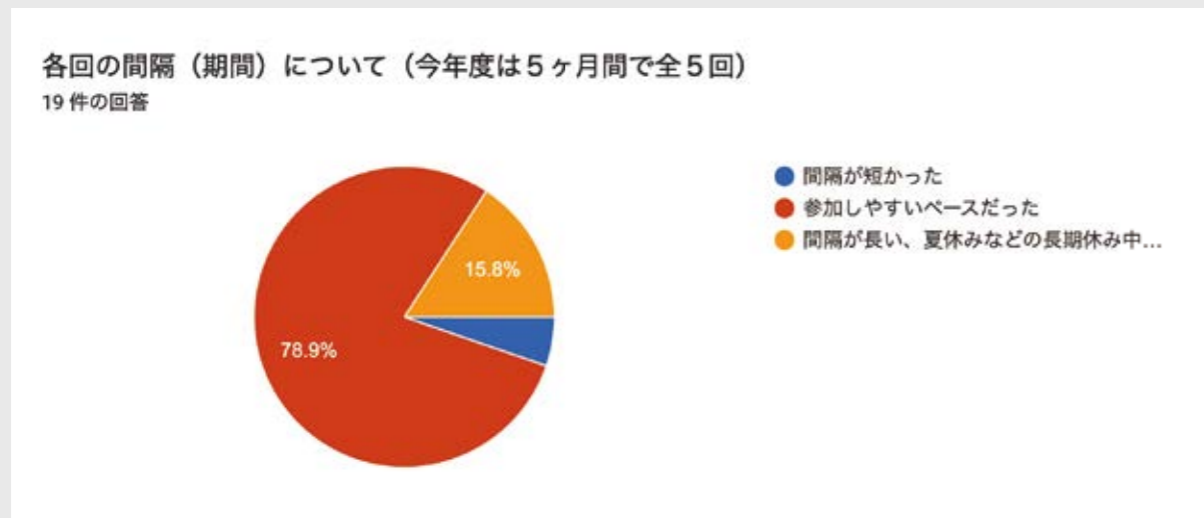
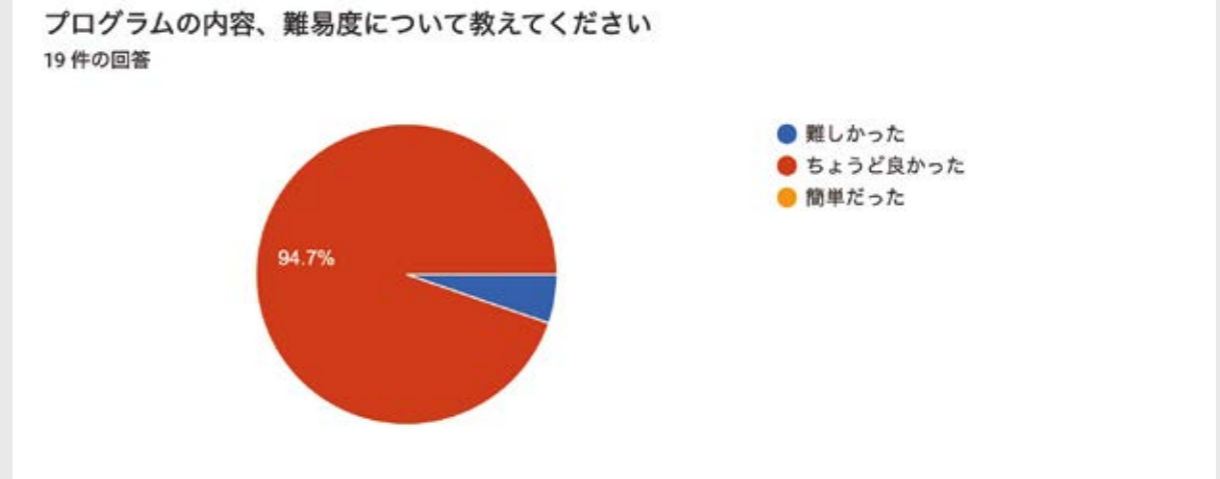
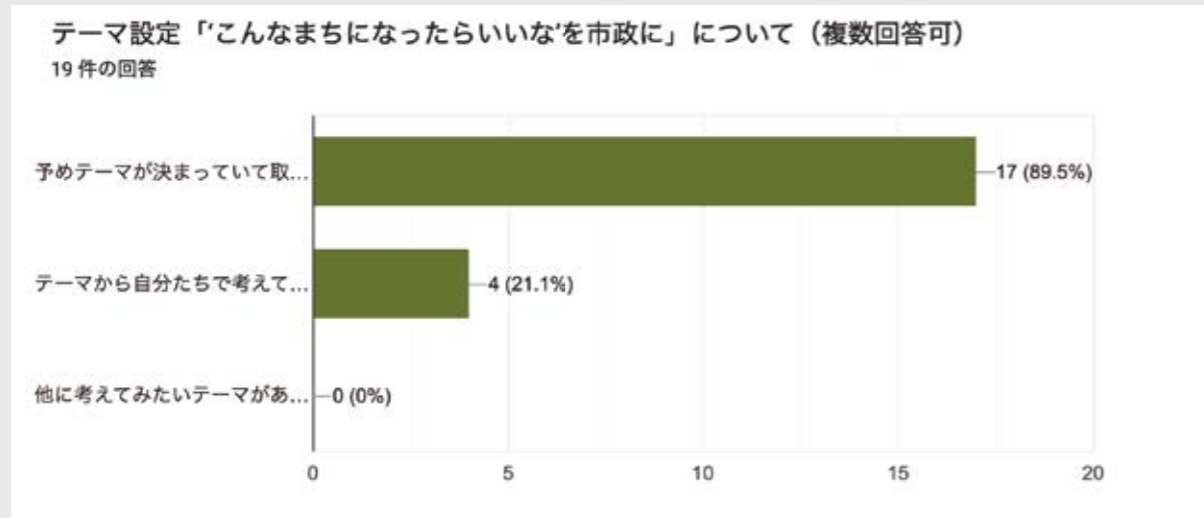
- ・ テンミリオンハウスの利用者はアナログ的な体験が得意なため、そこへのアプローチも必要だと思う。利用時間帯が中高生と合わないというのは反省点である。
- ・ 多世代交流については、中高生側のメリットがあるか？それを見いだせれば継続的な取り組みになると思います。

#### 「中高生世代の相談環境について」の提案へのコメント

- ・ 四コマ漫画、相談者プロフィールは具体的に検討していきたいと思います。
- ・ もし(動画の)リール製作を手伝っていただけなら、中高生に届く広報になるのでぜひ一緒にやりましょう。
- ・ 「事前アンケート」について、「解決してほしい Yes No」「どんなふうに接してほしい」が把握できると、ゴール設定ができて対応しやすいかも。
- ・ プレイスの事例でいうと、雑談でスタッフと関係を築き、会話の中から深刻な相談が出てくることもあるので、そういった場が複数必要なのかもしれない。
- ・ たしかにまず時間を考慮する必要があると感じた。そしてやはり人なんだろうなあと思うので、どんな人が相談を受けるのか見える化する必要もあった。
- ・ 相談に関しては、当事者である中高生の気持ちやこうすると使いやすいというアイデアがとてもよいと思いました。
- ・ 無記名アンケートにて、情報収集してみても？(←模造紙にありました！)
- ・ 「悩みを解決」「会話で発散」コースを分けるのは相談しやすくなるいい仕組みだと思います。カウンセラープロフィールをカードに書いておくのは相談がしやすくなりそうだと感じました。
- ・ それぞれの悩みがある、悩みが違おうとすると、様々な年代、職業の人に相談できるようにするのはいいと思いました。
- ・ 相談場所は、親や他の人にバレないように、一階多目的、二階自習室、三階相談室の順(だんだん静かになっていく)というのは、相談したい人が他の人に知られることなく気軽に相談できる場所としてよく考えられていると思いました。
- ・ 実際に、具体的に相談できる内容(解決までいったかはおいておいて)を視覚的に分かるように例を提示しておくというのは、「こんなこと相談していいの？」とされている人の相談のハードルを下げると思う。
- ・ アンケートを事前にとっておく、というのも、どういったことで中高生が悩んでいて何を望んでいるのか把握できて良いと思う。
- ・ スタッフとの交流の機会を増やす。
- ・ 居場所の延長上にある相談窓口というコンセプトは非常に説得力がありました。
- ・ 相談するハードルを下げるための工夫の提案が興味深い。
- ・ 営業時間、所在地についても参考になった。
- ・ 相談施設をもっと気軽に使いたいという思いがよくわかりました。会話、雑談から入ることが分かりやすかったです。相談の進め方(学校、親に伝える伝えない)も自分たちで決めたいという意見が印象的でした。
- ・ 信頼を築くために雑談から入ることを重視していることが分かりました。親バレ、学校バレをとてもしないことも印象的でした。対面で話したいというニーズもちゃんとあることがわかって安心しました。
- ・ 中高生は相談することにいろいろなハードルがあることが理解できた。まずは場所への信頼から、人・相談員への信頼になっていくように感じた。

- ・ 事前アンケートは、事前に本人の想いを聞いておくことで「思ったのと違った」という感覚をもたないようにできるのではないかと思った。相談する安心感につながると思う。
- ・ 相談場所のカードとかではなく、スタッフの情報や事例も掲載している方がわかりやすく相談しやすくなるんだと理解した。SNSの運用についても中高生が発信して良いのではという話があり、同世代の目に届くには同世代の目線で発信していけるといいと思った。
- ・ 相談相手の多様性について、専門家のみではなく、いろんな人とかかわりを持つ機会にもなり、いろんな立場の意見を聞ける機会になると思った。みらいでは、すでにいろんな世代のスタッフが関わっていますが、もう少し身近な世代の近い人もいいのかなと思いました。
- ・ 中高生の相談窓口については、今後の市の中高生の居場所の整備方針の参考となるような新しい視点での気づきがありました。
- ・ 相談のテーマでは、「プロフィール」「四コマ漫画」、それも定期的に更新しているとさらにおもしろくなると思った提案は良かった。

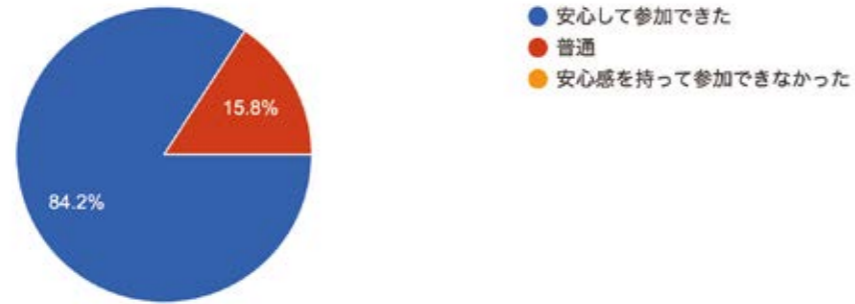




難易度、印象に残っているプログラムについて、選択理由も教えてください

発表や人との話し合いが好きなこともあって、自分の考えを教えられるのが楽しかったから。  
 みんなで提案に向けて資料を作成することができた。  
 みらいるや自習スペースのことを知れたから。  
 楽しむことができた。意見をぶつけ合うのが面白かった。  
 付箋などをi使って、ディスカッションをするのが楽しかったから。  
 提案作成でメンバーと意見のすり合わせができた。  
 今までやってきたことをやり切った感があった。  
 難易度:自分の考えやすいテーマだったので、比較的楽しかった。提案作成:自分たちの考えていることを見る化できていく感が楽しかった。  
 今回は提案内容が決まっています、テーマも自分自身とても共感でき、取り組みやすかったから。  
 自分たちがちゃんと作っている感があった。  
 フィールドワークで初めてみらいると子どもの権利擁護センターを訪れたのですが、実際に行かないと分からない改善点を知ることができ、良い経験になったと思います。  
 みんなで意見を出し合って決めていくのは楽しかった。  
 実際に議論している場に行き、雰囲気などを身に染みて感じることができたから。  
 提案ってなるとめっちゃムズイ！！一緒に考えるのはまったく違った...  
 自分にとってちょうどいい難易度でした。  
 身近な問題だったので、イメージしやすかった。自分の意見を相手に伝えることが好きなので、プレ提案会の印象が強く残った。  
 色んな人が来て想いを伝えられたから。  
 何をどうすれば分かりやすく伝わるかを話し合うのが楽しかった。  
 仲間と仲良くできたから。

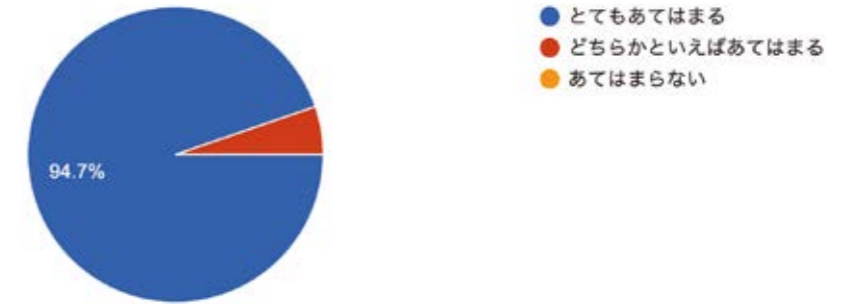
安心してワークや議論に参加できましたか  
19件の回答



上記の選択について可能であれば理由も教えてください

- 同世代が多かったのと、グループファシリテーターがしっかりまとめてくれたから。
- 同世代の人が多く、話が合った。
- 正解がないから
- みんなで会話できる温かい雰囲気があったから。
- ファシリテーターの方が話を振ってくださったから。
- サポートが手厚かったから。
- 言葉に詰まってしまっても、ファシリテーターの人が言いたかったことを上手くまとめてくれたから。
- 時間という縛りが…安心して出来なかった。
- メンバーが優しい人ばかりだったから。ファシリテーターさんの進行がとても上手だったから。
- 普通に楽しかった。みんな優しい。らぶ。
- 同年代の人しかいないから。みんな学校も違うっていうのが良かった。
- 話しやすい環境だったから。
- 前回はやっているから。

グループファシリテーターの存在は議論やワークの助けになりましたか  
19件の回答



上記の選択について可能であれば理由も教えてください

- 詰まったときに、今までの内容をまとめるなど助けてくれたから。
- それぞれ別の意見を持った人たちが真ん中の解決策を探すときに、意見をまとめたり、言い換えをしてくれた。
- わからないところを助けてくれたから。
- うまく話を聞き出してくれたり、意見をまとめるのをスムーズにしてくれて話しやすかったから。
- 議論が詰まった時などに議題などを提案してくれた。
- 大学で得た専門的な知識を教えてくれたり、皆の意見をまとめてくれたりしてもらったことで、会話がスムーズに進んだため。
- 詰まった時に助け舟を出してもらった。
- 思っていることを言葉にできなかったところを何度も助けてくれたので。
- 上記に加えて、話し合いが進まなかった時にファシリテーターの人たちが何度も助け舟を出してくれたから。
- 自分たちの助けになる助言が多かった。
- 意見が停滞したとき、対立したときに話を本筋に戻してくれたり、意見を上手くまとめて別の話題に転換したりと話し合いを進めるにあたって、とても大切な役割をしてくださったと思います。
- 進行が止まった時に次のステップまで進めてくれた。
- 自分たちが議論に詰まった際、積極的に意見を出してくれたから。
- たった1個、2個差だけど、すごい大人目線で意見くれた(泣)みんな優しい！！
- 司会のような立ち位置にいてくれたので議論が円滑に進んだから。
- 複雑なことを簡単なことにまとめてくれた。
- 分からないことや意見がほしいときに手助けしてもらえたから。
- 提案会の時に助けられたから。

令和7年度

武蔵野市 中高生世代ワークショップ Teensムサカツ 事業報告書

---

発行日 令和8年3月

発行 特定非営利活動法人 文化学習協同ネットワーク

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀1-14-3

TEL 0422-47-8706 / FAX 0422-47-8709

---

一部写真提供:武蔵野市

※ 本事業は特定非営利活動法人文化学習協同ネットワークが武蔵野市の委託を受けて実施しました。

